
刀と嫉妬と看板娘

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀と嫉妬と看板娘

【Nコード】

N2759B

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

騎士の命ともいうべき刀。明光学園生徒御用達の名店で起きた不可解な事件。それは10年前の闇が目覚めたことを知らせるものだった。水瀬・ルシフェル組という主役コンビより、今回は理沙が大活躍！刑事理沙の災難をご覧ください！

第一話 発端

騒ぎの原因は、はつきりしている。

近頃、学園の側に開店した武道具屋だ。

定年を迎えたおじいさんが、わずかな弟子と共に始めたお店。

生徒達のスタンブレードの修理や拵えを比較的低価格で引き受けてくれる。

伝統的な刀から最新型デザインの刀まで。

子供用のオモチャから真剣までと品揃えも多いし、主の指導は適切。

そして何より、生徒が熱心に店に足を運ぶ最大の理由。

それは、看板娘が美人だということだ。

●翌日

学校で、スタンブレードについて規制が追加された。

スタンブレードを凝った飾りで飾り立てることを禁止するということのだ。

スタンブレードをベースにした、バーチャルブレードというアメリカ生まれのチャンバラがマスコミで取り上げられたのも、スタンブレードの飾り立てを一層派手なモノにしていた。

昔ながらの拵えではなく、一流の現代デザイナー達がデザインしたバーチャルブレードは、まるでロボットアニメに出てきそうなデザイン。

学園でも瞬く間に大流行。

スタンブレードをバーチャルブレードの外装に交換するのがブームになって、体育の時間は、まるで騎士の訓練なのか、バーチャルブレードなのかわからない有様だった。

それが仇になったらしい。

先生達も大目には見ていたらしいけど、警備の際、目立ちすぎるとクレームがついたり、流行に追いつこうとして借金に走ったり、あまり感心できない方法でお金を稼いでいた生徒が警察沙汰を引き起こすにいたって、学校側も規制せざるを得なかったというのが本音だろう。

収まらないのが生徒達。

「せっかく金出したってのに」
ということらしい。

“騎士は刀代で身を滅ぼす”というけど、まさにその通りなんだろう。

そして、この人たちも例外じゃなかった。

●桜井美奈子の日記より

「ちっくしょ。拵えにいくらかかったと思ってるんだ」

羽山君がスタンプブレードを見つめながらぼやいていた。

確かに、羽山君のスタンプブレード、茶色地で結構綺麗。

「刀は切れてこそ価値がある。外見を飾ることに、何の意味がある」

秋篠君があきれ顔で羽山君に言ったけど、

「お前だって太刀拵えだろうが」

「こ、これは――」

「やっぱり、好きなんですねぇ。皆さん」

綾乃ちゃんが感心したような声で羽山君のスタンプブレードを見つめる。

「まあな」

「でも、こういう古風なのは、大目に見てもらえるんじゃないですか？」

「ああ。とりたいが、どうなんだろうなあ。黒漆が原則だとい

うから」

「やっぱり、皆さん、いい刀を持ちたいと思うものですね。」

「そりゃそうだ。最初は、どうせ訓練用だ、安物でいいって思うけど、慣れてくると、どうしても不満が出てくる」

「グローブやバツシュみたいなもの？」と私。

「まあ、近いな。ただ、やたら高い」

「高いの？」

「ブレード本体がまず高いし、全体的にカスタムモデルになんてしたら、確実に数十万は飛ぶ」

「数十万円？」

「そんなにするんだ。」

「見るか？」

羽山君がバックから取り出したのは、スタンプブレードのオーダーカタログ。

綺麗な刀が並んでいるけど……。

「うわっ。高い」

私のお小遣いじゃ絶対足りない。

「羽山君は、どれ買ったの？」

「これだ」

羽山君が指さしたモデルのお値段は――。

「80万!？」

「新刀なら一本買えるぞ？」同じ騎士の秋篠君も驚いた位の高額。

「尚武のオヤジに相談したら、俺は2尺5寸で反りが深い方がいいっていうんだ。薦められるままに試したら、これがしっくり来てな。それ以来、もう普通のが振れないんだ。ムチャ承知でオーダーしたよ。拵えとか、後で買えるモノは外してな。オヤジが安く仕入れてくれてさ。25万で何とかしてもらった」

「尚武のか？ああ、おれもあそこで薦められて太刀にしたんだ。打撃力にブレードがついていていい。このままなら柄が確実に壊れるっていわれてな」

「詐欺じゃないのお？」

疑わしい。そこまでわかるもんじゃないでしょ？

「いや。あそこのオヤジは、ブレード見ただけでクセを見抜くほどだ」

「本当？」かなり疑わしげな顔をしていたらしい。

秋篠君が言った。

「俺のブレードは、その後、すぐに折れたぞ」

「偶然だと思うけどなあ……」

「秋篠君は、それで太刀にしたのですか？」

「ああ。ブレードを太刀仕様にするのは、市販のパーツで出来るしね」

「が、拵えとなると、かなりする。バーチャルブレードというオモチャならともかく、素人の手に負えない」

「……だから、あの」

「欲張って、警察沙汰になるバカも出てくるわけだ」

「……」

「ま、論より証拠だ。放課後、見に行ってみるか？」

放課後――

お店の中は、そんなに広くない。

ただ、品揃えはすごいらしくて、いろんな刀が壁にかかっていた。

「いらっしやいませ」

明るい声で出迎えてくれたのは、若い女の店員さんだった。

「こんちわ。美桜^{みおう}さん」

「いらっしやい。光信君」

「知り合いなの？」

「常連だからな」

「……涼子さんにバラしていい？」

「涼子さんは、下手な勘ぐりはしない」

「じゃ、いいのね？」

「——ラーメン、食べないか？」

「ごち」

美桜さんは、そんな私達のやりとりを、クスクス笑って見守っていた。

長い髪を綺麗に結い上げた、着物姿のオトナの女性。

考えてみれば、なかなか見ることが出来ない、貴重な存在かも知れない。

男子生徒達がこぞってこの店に来るのが、何となくわかる気がした。

「あらっ？」

美桜さんが、何かに気づいたようだ。

「また来てるわね。あの子」

視線の先、追っていくと、ショーウィンドウの向こうからこちらを見つめる顔があった。

顔は、私達の存在に気づくと、慌てたように消えた。

「？」

ひっかかる。

なんで、そんなに慌てるんだろう。

入ってくればいいのに。

「おかしいですね」

綾乃ちゃんも疑問に思ったらしい。

無理はない。

消えた顔。

それは、水瀬君だった。

●翌日

体育の授業。

南雲が欠勤したため、体育の監督に立ったのは、詩乃だった。生徒達はなぜか全員、直立不動の姿勢をとらされている。

「じゃ、授業始めますよお」

コホンッ。

咳払いをした詩乃が、睨め付けるよう眼で生徒達を歩きながら口を開いた。

「わたしが訓練教官の桜井詩乃先任軍曹である」

生徒達は思わずお互いの顔を見合う。

「軍曹？」

「この前、階級なかったよな」

「ま、似合いじゃね？」

詩乃はそのまま大声で続ける。

「話しかけられたとき以外は口を開くな！口でクソたれる前と後に“サー”と言え！分かったか、ウジ虫ども！」

「……おい、言うのか？」

「諦めてノれよ。ノリだよノリ」

「じゃ、せえの……」

Sir, Yes Sir!

「ふざけるな！ 大声だせ！ タマ落としたか！」

Sir, Yes Sir!

「貴様ら雌豚どもが私の訓練に生き残れたら、各人が兵器となる。戦争に祈りを捧げる死の司祭だ。その日までウジ虫だ！地球上で最下等の生命体だ。貴様らは人間ではない」

両生動物のクソをかき集めた値打ちしかない！」

「それが教師のいう台詞か？」

「仮にも女だぜ？」

「……言うな」

「女として生きるの、諦めたんだろ」

「もったいない」

「貴様らは厳しい私を嫌う。だが憎めば、それだけ学ぶ。私は厳しいが公平だ。差別は許さん。黒豚、ユダ豚、イタ豚を、私は見下さん。すべて、平等に価値がない！」

「職員会議ものだぜ？」

「大体、豚って、誰のことだよ」

「自分の体型じゃね？ 鏡見ろよな。女だろ？」

生徒達の私語を聞きとがめた詩乃が吠えた。

「……誰だ！ どのクソだ！ アカの手先のお——」

詩乃もさすがに現実と空想の世界を分別する理性を、どこかで持っていたらしい。

幸いにして禁止用語を口にすることだけは押さえてくれた。

「コホン——じゃあね？ 校庭猛ダッシュで20周、それが終わったら腹筋・腕立て・ヒンズースクワット200回、それで」

「ち、ちょっと待って下さい」

当然、生徒の中から文句が出る。

「な、何ですか？ それ」

「準備体操の前」

「ぜ、絶対違う気が……」

「だめよお？ この位やらなきゃ。この後、各自の素振り1000

回が待っているんだから」

「む、無理っす」

生徒達全員が同時に頷いた。

「なんで？」

「なんでって——」

「騎士なんだからこれくらい出来るでしょお？」

「どういう奴ですか？ そいつは！」

「うー」

詩乃は、恨めしそうに生徒達を睨むと言いつた。

「これが出来ないよ、英語の河原崎先生におごるハメになるのよ。だから、頑張って」

「そんな無茶な」

「ムチャでもなんでもやる！」

詩乃は大声で怒鳴った。

「否定ばかり口にするな！ 私がやれと言ったらやれ！ このグズども！ それとも、努力してグズになったのか！？」

ビシッ！

どこから取りだしたのか、詩乃の手の中でムチがうなりを上げた。
「しばき倒されなければ、とっとと行けえ！」

I love working for Uncle Sam
Let me know who I am
1, 2, 3, 4, United States Marine
Corps!
1, 2, 3, 4, I love the Marine Corps!
ps!
my Corps!
your Corps!
our Corps!
The Marine Corps

「……って、何で俺達、こんな歌歌ってるんだ？」

「俺達、いつから海兵隊になったんだ？」

「聞くだけ無駄だ。一人だけ、ここが海兵隊の訓練校だと思いこんでいるのがあるからな」

「ほらそこお！トロトロ歩くな！じじいのフアックの方がまだ気合いが入ってるぞ！あと10周追加！」

結局、校庭をダッシュで40周走らされた生徒達だが、地獄はここから始まった。

一体、どこからこんなメニューを持ってきたのか知りたい位の、それは体育ではなく、シゴきだった。

防具なしでのスタンブレードのフルコンタクト（本気での殴り合い）を50キロのオモリを身につけて行うなど、他になんといえいいい？。

しかも、敗北者は、校庭を10周の後、勝つまで戦わされる。生徒達が互いに勝ちを融通しあったものの、ほとんどの生徒が、この時間だけで100周近くを走らせたという。

「も、もう、足が動かない……」

「お、俺はもうダメだ……」

「じ、除隊許可はどこだ？」

満足そうに見つめる先にいる生徒達は、ほぼ全員が校庭にへたばっていた。

喋れるならまだまし。

ほとんどの生徒はしゃべることすらままならない有様だ。

「よし。ご苦労だった！」

詩乃は叫んだ。

「本日をもって貴様らはウジ虫を卒業する！」

本日から貴様らは海兵隊員である。兄弟の絆に結ばれる。貴様らのくたばるその日まで、どこにしようと海兵隊員は貴様らの兄弟だ！多くはベトナムへ向かう。ある者は二度と戻らない。だが肝に銘じておけ。

海兵は死ぬ。

死ぬために我々は存在する。

だが海兵は永遠である。

つまり——貴様らも永遠である！」

詩乃の演説に答える者は、少なくとも生徒達の間には、誰もいるはずもなく、詩乃はそれを暗黙の了解と受け止めた。

「よし」

去り際に、詩乃は意味深な言葉を言い残していった。

「といってあげられるように、頑張ってね？じゃ、お疲れ様。」

「どういうことだ？」

「知るかよ……う、動けねえ……」

「い、いてえ……」

「これは訓練じゃねえ……実戦だ」

「ここは明光じゃねえ……沖縄か？硫黄島か？」

「このまま歩かされたらバターンだな……」

予鈴が鳴り響く中、生徒達は立ち上がることすら出来ず、ほとんどの生徒が保健室送りとなったのは、いうまでもない。

そして、それが、翌日の体育へと続くことなど、誰一人として予想すらしなかったわけで……。

第二話 「尚武」

●明光学園校庭

「はあい。今日はここまでえ！」

詩乃ののんびりした声で体育の授業は終わった。

いい汗を流した生徒達は三々五々、教室へ——戻れなかった。

むしろ、彼らの体育はこれから始まっていた。

「く、工藤、しっかりしろ」

「お、俺はもうダメだ……」

「だ、誰か、俺を保健室まで連れて行ってくれえ……」

校庭にへたばった男子生徒達が、うめき声をあげつつ、保健室まで匍匐前進の訓練——ではなく、這い始めたのだ。

理由は簡単。

詩乃のシゴきのせいだ。

騎士とはいえ、校庭100周猛ダッシュが体にかかる負担は半端ではない。

カリキュラムも、騎士をロボットか何かと勘違いしているとしたかいいようなない、過酷さだ。

いくら若さしか取り柄がない騎士養成コースの男子生徒達とはいえ、たまっものではない。

気の毒がった女子達や、見るに見かねた他クラスの騎士養成コースの生徒達が保健室まで運ぶ友情あふれる光景は、この学校では見られない。

同じクラスの同じコースの女子ですら、だ。

「いくらだす？」

助けを求めた男子への、女子代表坂巻の言葉がこれだから、もうどうしようもない。

「女子の手を借りるな。ケツの毛までむしられる」
が一部男子生徒の合い言葉たる騎士養成コースだ。

男子の沽券云々ではなく、自己の財布の中身こそ、彼らの心配なのだ。

だからこそ、一時の恥とはいえ、集団で廊下をはいつくばって保健室まで向かうなどという、とんでもない事すら、彼らにとってやむを得ないことだ。

「本当は、困っているんだけどねえ……」

「何とかありませんか？」

保健室に収まりきらず、廊下に寝かされた生徒達の検診を終えた保険医の三千院先生が、お茶をすすりながら水瀬相手にぼやいた。

「湿布や筋肉痛の薬だってもう在庫がないのよ？また、買ってこなくちゃいけないし、大変なんだから」

「大変ですねえ」

テーブルの上の漬け物に手を伸ばしながら、水瀬は適当に相づちをうった。

「それにしても、水瀬君は、平気そうね」

そういつて、同じくお茶をすするのは、校長だった。

うめく生徒達には、型どおりの心配だけですませていた。

「鍛えてますから。あ、この漬け物美味しい」

「でしょう？よく漬かっているでしょ」

「隠し味は、芥子ですか？」

「いいえ。これはね——」

昼飯も食べられず、筋肉痛にうめく生徒達を尻目に、水瀬達は茶

飲み話に花を咲かせていた。

●放課後

「ねえ。きちんと歩けないの？」

「あ、歩けるならやってるって」

「ほ、放っておいてくれ」

ほとんどこがに股であるく羽山達に、あきれ顔で声をかけるのは美奈子達だ。

「騎士でも筋肉痛になるんだあ」

「いつ、一応、人間だぜ？」反論する羽山。

「それに、あんなシゴき受けたら、普通はこうなる」理解を求める秋篠。

「それにしても湿布くさあい！」鼻をつまみながら後ずさる未亜だが、二人のカバンを持つ水瀬に気づき、声をかけた。

「そういえば、水瀬君は平気そうだね」

「うん」

「羽山君達は、ほら。こんななのに」
つんつ。

「!!!!」

足を未亜につつかれた羽山が、声にならない悲鳴を上げてへたり込む。

「し、信楽……て、てめえ……!!!!!!」

「わーっ。動けないから恐くなあい！」

「あ、後で覚えとけよ？」

「忘れる」

「み、水瀬、お前、本当に平気なのか？」

「うん」

「何でだ？」

「小さい頃から、似たような修行受けていたから。みんなももう

少しすれば、体が慣れるよ」

「この地獄をまだ味わえというのか？」

「そのうち、どうってことなくなるよ」

「おれは御免被る」

「同じく」

羽山と秋篠は、力一杯うなずき会う。

「――ま、いいけどね」

水瀬は、二人のカバンを持ち直すと訊ねた。

「で？この後、家に帰るの？」

「いや。尚武に寄る」

「え？」

水瀬が不意に足を止めた。その顔は、心底困ったという顔だ。

「どうした？」

「ぼ、僕、急な用事思い出したから、ここで」

「待った」

ぐいっ。

二人のカバンを置いて走り出そうとした水瀬を止めたのは、美奈子だった。

襟首を掴まれた水瀬が、宙に浮かんでジタバタしている。

「うわ。美奈子ちゃん、片手で持ち上げてるよ」

「馬鹿力……」

「おい」

「――で？」

「へ？」

「なあんで、尚武の名前が出た途端、そんなにイヤそうな顔したのかなあ？」

飼い猫を叱るように、水瀬の視線を自分の視線まで持ち上げてたずねる美奈子。

「べ、別に僕は」

「――ま、いいわ」

ほっ。とした安堵もつかの間、水瀬は次の一言に青くなった。

「行けばわかることだし」

「へっ？」

子猫をそうするように、片手に水瀬をぶら下げた美奈子が、みんなを引き連れて尚武に入ったのは、それから本当にすぐのことだった。

●尚武

店の前まで来た美奈子には、ふと、気になったことがあった。

この辺は、葉月市の中でも一等地だ。

戦前から広大な敷地を持つ学校はともかく、地価はべらぼうに高い。

にもかかわらず、よく見ると、尚武の敷地は、かなり広い。

店は狭いが、倉庫と工房はかなりのスペースがさかれているようだ。

「ねえ。ここって、工場かなんかあったっけ？」

未亜に話すと、未亜は笑って否定した。

「違うよお」

「そうだったっけ？」

「美奈子ちゃん。葉月っ子なのに、知らないのお？」

「？」

「私達が小学1年か2年の頃の話だけだね」

未亜は、店の隣にある石碑の前に美奈子達を案内した。

そこは、古ぼけた慰霊碑らしい石碑だった。

「諦めて眠って下さい。過ちは繰り返すものです」

言われて眠れる物好きがいるか？と聞きたくなるような言葉が刻まれた石碑の前で、美奈子は未亜に聞いた。

「この辺も昔は普通の住宅街。その内の一軒のご主人がね？グレた娘をナタでメッタ斬りにした後、奥さんと無理心中を図ろうとしたんだよ」

「娘さんが犠牲者ってわけ？にしては大げさな慰霊碑ね」

「で、それを止めようとしたおじいさんと、交番のお巡りさん3人くらいを散弾銃で撃ち殺して、奥さんをバラバラに切り刻んだ挙げ句、自分はガソリンかぶって焼身自殺したんだ。風が強い日でね。隣近所まで延焼してさ」

「……」

「そうそう。隣が老人ホーム。施設が防火設備ケチっててね。あつという間に火が回ってさ。何人逃げ遅れて死んだんだっけ」

「……なんで、そんな所に住むわけ？」

「ま、物好きはたくさんいるってことだね。バブルの頃だったし。でも、バブルの後は、このお店出来るまで、ここいら更地だよ？」

「へ？」

「何か出来る度にさ。不幸が続いて。スーパーになったら大量に死人が出るような食中毒が起きて、店長が一家心中。パチンコ屋は開店当日に建物が崩落して死者100人。周辺、オバケが出るって噂でもちきりになったんだよ？で、分譲住宅にしたけど、死人やら不幸やらが出るわ出るわ」

「あ、あのね……？」

「で、斡旋した不動産屋や建築業者にも不幸が続きまくってね。だから、多分、死人だけでも1000人位軽くいつてるよ？はははっ」

「はははっじゃない！」

未亜は未亜に怒鳴りつけた。

「そんな恐い——じゃない！そんな曰く付きの土地に何で家なんて建てるのよ！？」

「安い、からじゃない？ここまで因縁ついて、しかも、それが白日の下に曝されてるわけだから、買手なんてつくわけないじゃん。二束三文もいいとこだよ。ここんところ、地価も暴落気味だし」

「この店の人たちが非常識ってことだけはわかった気がするわぐいつ。」

勇気を振り絞るように、美奈子は水瀬を引きずって店の中に入った。

「美奈子ちゃん、今夜、トイレ行ける？」

「さっさと済ませておく——何を言わせるのよ！？」

「にゃあ？じゃあ、水瀬君に今夜、眠れないくらい激しく愛してもらえばあ？」

「ばっ！み、未亜！」

すでに店内にいた多数の生徒達の視線に気づき、美奈子はいたたまれずに下を向いたままになった。

「あら。いらっしやい。——えっと、未亜ちゃんに美奈子ちゃんだったわね？」

声をかけてきたのは、着物姿の美桜だった。

数本の刀を大切そうに抱えている。

近くに来ると、物静かな、「古風な美人」という言葉がしつくりくるような、つややかな美人であることがわかる。

自分達では絶対に出せない「大人の女」の魅力が、少なくとも美奈子にはうらやましかった。

「こんにちわ。お邪魔します」

「いえいえ。あら。秋篠君に羽山君。いつもごひいきに……どうしたの？」

美桜も、羽山達のがに股が気になったらしい。

「昨日から、何人もそういう生徒さん達が来るの。最近、そういう歩き方がはやっているのかしら」

「んなわけないでしょう」

「？」

羽山は、かいつまんで事情を説明したが、美桜は、心当たりがあるようだ。

「ははぁん」

ぽんっ。と、手を叩いて納得を示す美桜。

「あの先生ね？」

「心当たりが？」

「ああ。これこれ。この本買ってた人」

美桜が書籍コーナーから取りだしたのは、一冊の本。

『これぞシゴきだ！軍隊にみる騎士のシゴきのすべて』

羽山と秋篠は、思わず無言で顔を見合わせてしまった。

「なんです？これ」

「詳しくは読んだことないけど、軍隊でね？特殊部隊っていうのかしら？その人たちを鍛えるのにどんなことしたかっていう本らしいわ」

「詩乃ちゃん、まさか」

「ああ。騎士っていうから、これが当然だと思ってるな。きっと」

「こら待て！」

策を考えようとしていた二人の耳に、美奈子の声が聞こえてきた。みんなの影に隠れ、こっそり逃げようとしていた水瀬の首根っこを美奈子が捕まえたのだ。

「あら？水瀬様ん所の坊ちゃん？」

美桜の一言に、いまだジタバタしていた水瀬の動きが止まった。

「あ、う。」

バツが悪いという顔で、赤面したままの水瀬。

「知り合いですか？」

「水瀬家はお得意様ですからね。坊ちゃん？まだ――」

「わーっ！わーっ！わーっ！」

水瀬は慌てて美桜の言葉を遮った。

「ダメダメダメえ！」

その慌てぶりに、一瞬驚いた表情を見せた美桜だったが、とっさに事情を察したという表情になると、笑いながら頷いた。

「わかりました。内証、ですね？」

コクコクコク。

青くなりながら頷く水瀬の頭を撫でながら、美桜は一緒に頷いて見せた。

「……」

納得いかないのが周囲だ。

こと、二人が妙に親密な感じがするのが、少なくとも美奈子には気になった（羽山達に言わせると、「母子のほほえましい会話」になるが）。

なにより、会話が進むにつれて出てきた、美桜の発言が、美奈子という魚に大きな針となってひっかかった。

「結構スゴイんですよ？私」

「そうなの？」

「ええ。自分で見つめても、スタイルに惚れ惚れしますもの」

「うーん。すごいんだあ」

「ええ。自身があります。どうです？」

美桜は、水瀬に何事かをこっそり耳打ちした後、頷いた水瀬と共に、従業員専用のプレートが貼られた部屋に消えていった。

「水瀬、何か頼んでいるな？」

「お得意様っていつていたから、きつとオヤジさんの関係じゃないか？」

「にしては、あの慌てぶりはおかしいわ」

「それに、美桜さんのスタイルとどんな関係が？」

刀を見るふりをして、それを見送った羽山達は、そのことばかりを話題にしていた。

時間は30分位。

再びドアが明けられた時、水瀬も美桜も顔が上気していた上、何故か二人とも着衣が乱れていた。

それが、美奈子の警戒心に火をつけた。

「何を見てきたんだ」

「美桜さんの――」ポツリポツリとしたしゃべり方のため、誰も最後まで聞き取ることが出来なかったのもまずかった。

「美桜さんの？」

「スゴかったあ」

感極まったという感じの水瀬が興奮気味に言う。

「すごいんだ。美桜さんって。最高だよお」

「お褒めにあずかりまして……ただ、最後にごめんなさいね？とんだ粗相を」

「全然。かわいいもんです」

「やだ。坊ちゃんったら」

赤面して照れる美桜だが、美奈子の顔は、青く凍り付いていた。理由は二つ。

一つは、水瀬から香る香水の匂い。

もう一つは、水瀬の襟首についた口紅。間違いなく、それらは美桜のものだった。

第三話 「閉ざされた心」

●桜井美奈子の日記より

みんなと別れた後、私は一人で予備校に向かおうとして、足を止めた。

後ろに未亜がいた。なんだか、とても言いづらそうな顔をしていた。

「どうしたの？」

「ねえ、美奈子ちゃん、どうして？」

「何が？」

「水瀬君、首に口紅付けてたよ？」

「だから？」

「きつ、気にならないの？」

「別に？」

「うそつかないほうがいいよ。私達、友達でしょ？」

「悪友ってほうが正しい気がするけど」

「……わかった。じゃ、いい」

結局、未亜は何が言いたかったんだろう？

電話をかけたけど、何故か返事がなかった。

明日、聞いてみることにしよう。

もう、今日は早く寝よう。

なんで？

そう思うから早く寝るの！

寝るったら寝る！

寝てやるんだから！！！！

●未亜のブログ日記より

美奈子ちゃん、完全に怒っていた。理由は簡単。

あの30分の間で、美桜さんと水瀬君の間に何があったか、察しなかったからだ（それが正しいかどうかは別ね？）

美奈子ちゃんは、本当に怒ると、他人どころか自分の言葉にさえ耳を貸さなくなる悪いところがある。

殻に籠もっちゃって、一番大切なモノさえ無視してしまう。

だから、多分、ううん、絶対、今の美奈子ちゃんは、某アイドル並に暴走すべきはずなのに、何も気づいていない。

それで、人との関係を壊しちゃうんだから世話がない。

村上先輩の時だって、このせいで全部壊れたのに。

あれだけ泣くハメになったのに。

美奈子ちゃんは、何一つ学んでいない。

美奈子ちゃんは、何一つ変わっていない。

また、同じことを、同じ失敗を繰り返すつもりかなあ……。
そう思うと、なんだか腹が立ってくる。

今、何度目かの美奈子ちゃんから電話あったけど、無視。

きつと、水瀬君のことじゃない。

私が何で怒っているかを知りたいだけ。

そんなことに答えるのは、友達じゃないよ。

ここは一つ、親友が肌を脱いであげましょう！！

……あつ、別に本当に脱ぐわけじゃないからね？

例えだよ？ た・と・え（^―^）

●瀬戸邸台所

グウオオオオオオオオオオオツツ——！！！！

由里香は、突然家中を揺るがせた轟音の正体を、とっさには理解できなかった。

特撮映画で怪獣がうめいているような音に家中の家具が悲鳴を上げる。

「？」

夫と見合わせた後、その音の出所が、娘の部屋だとわかった由里香は、ため息まじりに台所から出た。

（どうせ、悠理君が浮気したあのだろう）

由里香にして見ればささいなことだ。

「誰それと仲良くしていた」

娘は、いつもそれだけで暴れまくるから世話がない。

「殺る時は殺れ」と諭してはいるものの、それでも娘の対応は稚拙すぎる。

「殺る」なら「殺る」で、二人きりの時、思う存分「殺れ」ばいいのだ。

なのに……。

あの娘と来た日には——。

体育館裏で「殺る」程度ならいい。

だが、人前で、他人を巻き込んで「殺る」のはまずい。

「殺る」のは、あくまで刑罰であり、本人の骨の髄、いや、D N A、もっといって原子レベルで浮気するとどうなるかをたたき込む

ためだ。

周囲への見せしめのためではない。
それがわかっていない。

大体、娘は自分の立場がわかってるのか時々疑わしくなる。

アイドルになると決めた時、絶対迷惑をかけないと泣いて約束してきたのはあの子の方だ。

別にこっちから頼んだわけではない。

それでも誓ったものは護ってもらわねば困る。

にもかかわらず、ここの所の娘の凶状はどうだ？

傷害（未遂含む）、殺人未遂、器物破損、恐喝、買収――。

もみ消し工作に義理の父（になる予定……というか、なってもらわなければ、娘の嫁のもらい手がなくなる）にどれだけ迷惑をかけているかわかってるんだろうか。

アイドルともなれば、世間体には人一倍、神経を使ってもらわなければならぬというのに、娘はそういうことに頓着しない。

事務所から何度も怒られているのに、何も変えようとすらしらない。

いかに悠理君しか見えていないとはいえ、娘の今のありようは問題だ。

入れ替わりの早い芸能界。稼げるのはあと数年しかないが、それでも、自分の老後の安泰のためにも、娘にはもう少し考えてもらわねばならない。

ただでさえ、自分は魔力が強いために他の人より寿命が長いのだ。

由里香は、自分の老後のために、娘の部屋の扉を開けた。

●瀬戸邸 綾乃の部屋

「ですから、悠理君が浮気したというのね？」

一体、何度同じ質問をしたのか、由里香は50から先を数えていなかった。

「でなければ、何でキスマークなんてつけるんですか!？」

確かにそうかも知れない。

由里香は思う。

昭博さんがキスマークなんて付けてきた日には、ミンチにする程度ですませはしない。

娘の心境がわからないわけではないが、

「綾乃、もう少し落ち着きなさい。それだけでは浮気の確認とはならないでしょう？」

「じゃあ、お母さんは、お父さんが同じ事したら、どうするの？」

「そりゃ、殺しますけど……」

しまった。と思った時は遅すぎた。

「ほらあ!」

綾乃は我が意を得たりといわんばかりに詰め寄ってきた。

「お母さんがするなら、私がしても問題は」

「あなたは、もっと自分の立場をわきまえなければいけません」

由里香は語気を強めて娘を諭した。

「あなたは高校生、しかもアイドルですよ?そんな立場にある者が、凶状に及べば、世間様にどれだけのご迷惑をおかけするか」

「だって浮気するんですもの!」

ダメだ。

由里香はメビウスのリングのような、娘との会話のループに、いい加減、うんざりした。

堂々巡りもいいところだ。

「で？その相手の人はどんな人なのです？」

「……それは」

「知らないというのですか？」

「知っている人なら、弱みを握るなりして潰しています！でも、知らない人だからこそ、決定的な手の打ちようがないわけで」

わーんっ。綾乃は泣き崩れた。

「酷すぎます。私、ずっと信じていたのに……浮気するなんて……」

綾乃はティッシュペーパーの箱をバラバラに引き裂きながら言う。

「もう、悠理君を信じられません」

声を詰まらせ、涙を流し続ける娘の前に、この時、初めて由里香は娘の変化に気づいた。

普段なら、暴れるだけ暴れて満足するはずの娘が、妙に弱気になっている。

「でも、その人を見たことがあるんでしょう？」

「とても綺麗な大人の女性でした」

「……悠理君、年上好みだったかしら？」

「相手がシヨタかもしれないじゃないですか！あのナターシャさんみたいに！」

しばらく、二人は沈黙した。

由里香は、じっと娘の顔を見つめたまま、何も言わない。

「……つまり、あなた、「負けた」って思ったのね？その女性と自分を比較して」

沈黙を破るように、由里香は開口一番、綾乃に問いかけた。

「……はい」

それは、由里香が聞きたくない答えではあった。
だから、しょぼんとする娘をしばらく見つめた後、由里香は言った。

「だからダメなんです」

「——え？」

「いいですか？ あなたも倉橋直系の血を引く身、そんな弱気では、私の人生設計が——いえ、倉橋の血が泣きます！」

「お母さん？」

「あなたは内心で、悠理君の浮気を認めているんです」

「べっ、別に認めているわけでは」

「いいえ！ 確かに、悠理君も異性に関心を持ち始める年頃です。エッチな方にも興味津々のはず。それはしかたありません。ですが、それが他の女に向かうと言うことは、悠理君の心と魂を、あなたが掴んでいないからです！」

恐ろしいことを力説する母の弁に、綾乃は次第に引き込まれていった。

「あなたの学校の先生でいますよね？ 桜井先生。先生はこの前の父兄会ですばらしいことをおっしゃっておいででした。夫婦の愛情についてです」

普通なら、嫌な予感に駆られるものだが、そこに綾乃はいなかった。

「『海兵隊より早く神はこの世にあった！ 心はジーザスに捧げてもよい！ だが貴様らのケツは海兵隊のものだ！』——と。たとえば話でしようが、私は、『信心はともかくも、夫の肉体から生み出す旨味は、すべて妻のモノだ』と解釈しています。それを確かにするために、妻は夫をコントロールしなければならぬのです！！ あなたはまず、それができていません！！」

「お母さん……」

「悠理君が奥手だと、以前、あなたは漏らしていましたけど、それはあなたの甘えでしかありません！

押して押して、押しまくるのです！

それでダメならもっと押しなさい！権謀術数蠢く倉橋家の巫女は、代々、そうして夫を選び、手にしてきたのです。

昭博さんだって、私が小さい頃からあてがわれた数ある候補の中から選び抜き、あの手この手で婚約者の地位を押しつけたのです。

御母様だって、強請、恐喝、暴行、洗脳、呪詛と、およそ考えられるあらゆる手段の末、夫を二人も手に入れたのですよ！？

倉橋の女に退却という言葉は存在しません！その血を引くあなたが、ただ泣いているなんて、許されはしません！」

由里香はどこからか出したお茶を飲み干しながら続けた。

「あなたには立場があります。それでもです」

「それは、そうですけど……」

「夫の浮気は妻の落ち度、悠理君が浮気したというなら、それはあなたの落ち度です！」

「……」

「妻とは、浮気と死闘することを運命づけられた戦士なのです！その覚悟が、あなたには欠けています！だから、そんな弱気な態度になるのです！」

この時、録音でもしておけば、自分の発言が如何に一般的な母親として常軌を逸しているか、イヤでもわかったろう。

しかし、この時の由里香は、娘以上にタガが外れていた。

「ど、努力はしています。でも、悠理君が浮気性で」

まだ、少なくともこの瞬間までは理性があった綾乃は弱々しく抗議したが、由里香の耳にすら届かなかった。

「由忠さんの悪癖は知ってます。その遺伝でしょう。しかし、遥香さんだって常に全力で戦い抜いています。傷は浅くはないですが、偉大な戦いを繰り広げました。それは、同じ女として、妻として、最高の賛辞に値すると信じています。あなたは、いずれ義理の母となる方の、偉大なる栄光に泥を塗るつもりですか!？」

「!?!」

「確かに、私から見ても、悠理君は抜けているように抜け目がありません。間違いなく、あなたに隠れて浮気するなど、朝飯前にやっつのけるでしょう」

綾乃の脳裏を浮気現場光景が、G1レース出場馬顔負けのスピードで駆け抜けていった。

「ど、どうしたらいいんでしょうか」

青を通り越して白くなった綾乃は、母にすがりついて訊ねた。

「教えて下さい!」

「言ったでしょう? 倉橋の女に退却という言葉は存在しないと。手段は問いません。水瀬君の魂を驚掴みにし、そして、敵はすべからず殲滅するのです!」

「は、はい」

母の激励と解釈した綾乃は涙を流して母を見つめ直した。

戦いを繰り広げてきた、頼れる歴戦の戦士にして、偉大な師匠が、そこにいた。

「私の老後のためにも、勇気を出して。あなたは、私の子です」

「はいっ!」

綾乃は言った。

「私、私、絶対、水瀬君を死守して見せます!」

同じ頃、母娘の筒抜けの会話を聞いた昭博が、人生を呪いながら布団をかぶって震えていたことなど、母娘が知ったことではなかった。

そういわれても……。

それが、ルシフェルの偽りのない感想だった。

正直、ルシフェルは困惑していた。

「お願いします！力を貸して下さい！」

「あ、あのね？」

「水瀬君を力づくでねじ伏せるには、どうしても力が必要なんです！」

「……」

目の前で力説しているのは綾乃だ。

問題は、その力説する内容が、あまりに滅茶苦茶すぎることだ。

（浮気者の水瀬君を懲らしめたいから、力を貸してくれ）

というのが、綾乃の申し出だった。

しかし、その疑惑のそもそもの理由を知っているルシフェルとしては、それはとても受け入れられるものではない。

「あ、綾乃ちゃん、あの、少し落ち着いて？ね？」

「私は冷静です！あの浮気者の水瀬君にギャフンといわせるまで、怒りの虫はおさまるはずが」

「それが、もう冷静じゃないっていうの。そうでしょ？」

「そんなことはありません！」

で、話が元に戻る。

その度に出てくるため息を隠そうともせず、たまりかねたルシフェルが言った。

「でも、そのなんとかいう女の人と、肉体関係にあるっていう、確固たる証拠もないんでしょう？」

「どこどうすれば、キスマークつけて香水の匂いまでするんです

か!？」

「――まあ、とにかく、本人に聞いてみるのが一番じゃない？
水瀬君、プライベートじゃ、なかなかウソつける人じゃないから」

「そうなんですか？」

「つていうか、そこまで信じていないこと自体が、まず問題だと思っけどね」

じっとルシフェルの顔を見つめた綾乃は、決心したように言った。
「……わかりました」

しかし、綾乃が動くより先に、水瀬はその身柄を拘束されていた。

「というわけで」

教室では、すでに水瀬がロープで椅子にくくりつけられ、その周囲を、異様なオーラを放った男子生徒達が十重二十重に取り囲んでいた。

「なにが、というわけなの？」

「黙れ。これより、水瀬悠理に対する人民裁判を開始する」

男子生徒達の真ん中に立って発言しているのは、品田だった。

「何ソレ」

「被告人に発言権は認められない。当軍事裁判においては――」

「人民裁判じゃなかったの？」

「誰か、被告人に猿ぐつわさせろ――よし。ええか？水瀬。お前は、綾乃ちゃん、美奈子ちゃん、そして萌子ちゃんをたぶらかし、あまつさえ、美桜さんにまで手を出した！力づくでや！これは全人類に対する犯罪行為に他ならない！」

品田の発言に、他の男子生徒達が無言で頷く。

「アイドル、委員長、妹、そして年上！お前の幅広いフェチのハイブリットさには感服する。だが、しかし、だからといって、この未曾有の全人類的犯罪を見逃すほど、わしらの法廷は甘くはない！」

そもその問題は、明光学園に普通コースや芸能コースで入る男子生徒の目的とは何か？という所まで戻らなければならない。

芸能コースに在籍していたとしても、将来、少なくとも今を芸能人として活躍している女子生徒と違い、ほとんどが大した才能がなく、将来も渴望されていない。

そういう意味で、男子生徒のほとんどは、女にとってカスがほとんどなのだ。

そんな男子生徒達が、それでもこぞって明光学園に入学する理由。それは、「アイドルと仲良くなりたい」そのもの。

「可愛い彼女が欲しい」ともいう。

しかし、ほぼ99%の男子生徒達はそれをかなえることが出来ない。

当たり前といえば当たり前の話だが、だからこそ、モテまくる他の男子生徒達は、神に逆らう悪魔以上の存在になる。

わかりやすく言えば、「女にモテやがってこの野郎！」となる。

トップアイドル瀬戸綾乃

報道部きつての美少女とされる桜井美奈子

ポスト瀬戸綾乃とされる加納萌子

そして大人の魅力で赤丸急上昇中の須藤美桜

この4人を手玉にとる（彼らの主観による）水瀬の存在は、絶対に許せるものではない。

「さあ、水瀬！判決は選ばせてやる！私刑と死刑、ついでに極刑、どれがいい！？」

「どこが違うのか教えて欲しいんだけど」

「私刑はここでフクロにしたあと、プールに沈める、死刑は焼却炉に放り込む！いわば水葬と火葬や。極刑はそのセットコース。お得やろ！？さあ、どれがいい！？」

「ろ、老衰がいいな。できれば畳の上で」

「生きたままコンクリ詰めか？いい度胸や！」

誰かコンクリ買ってこい！

ドラム缶探してこい！

畳探せ！なければゴザでもいい！！

にわかに騒がしくなった教室に入ってきたのは、綾乃とルシフェルだった。

その異様な雰囲気、二人とも驚きを隠せない。

「ど、どうしたというのですか！？」

「綾乃ちゃん」

品田は格好をつけて綾乃の肩に手をやると、まるで諭すように言った。

「水瀬は、遠くに旅立つんや」

「はあ？」

「遠くに旅立って、生まれ変わるんや。そやな、どっかの宗教家が言っていたな。こういうの、ポアするって。寺育ちのワシからいえば、解脱やな———そういうことや」

「????？」

困惑する綾乃をいたわるように、品田は言った。

「いままでのことは、野良犬にかまれたとでも思って忘れていいんや。この害虫は、ワシ等がきちんと始末するさかい」

「あ、あの……何を言っているんだかさっぱり……」

「辛かったんやな」

「はあっ!？」

「美桜さんもそうや。きっと力づくやったんやろう。———いやいや、言わんでもええ!女として味わわされた綾乃ちゃん達の屈辱は、ワシ等がきっちり晴らしてやるさかい」

「美桜さんも……って」

「美桜さんはな？ 昨晚、水瀬の慰み者にされた挙げ句、今日は寝込んでいるそうや」

「ど、どういことですか？」

「尚武に泥棒が入ったそうや。ところが、何も盗まれてはおらん。そのかわり、美桜さん、朝から寝込んでいるそうや。つまり！ 敵の狙いは美桜さんただ一人！ しかも！ 美桜さんをストーカーの如く付け狙っていると噂されていたのが、この下半身無節操男や！」

「……」

ちらと水瀬を見る。

すでにどこからか持ち込まれたドラム缶の中に放り込まれた水瀬は、首がもげるかという勢いで横に振っていた。

猿ぐつわがきいていて、しゃべることさえ出来ないが、必死に否定しているのだけはわかる。

「ちよつと待って」

止めに入ったのはルシフェルだった。

「尚武に泥棒って、本当なの？」

「ああ。ルシフェルさん。泥棒ってなつとるが、こいつが夜ばいにいったに違いないんや！」

「あ、あの……だから、ちよつと待って」

ルシフェルは困惑したように言った。

「あのね？ 昨日は、夜遅くまで水瀬君、家にいたよ？ お父さんの仕事の手伝いで」

「そんな庇わんでもええ！ ルシフェルさんにまで手を出していたなんて！」

「おおっ！」

周囲がざわつき出す。

水瀬を殺せ！

血祭りに上げろ！

挽肉にしてしまえ！

あちこちで物騒な声上がる。

「みい！みんな怒っとる！正しい、まさに正義の反応や！二人とも、安心していいで！こんな色魔、ワシ等が始末したるけん！」

「始末するのはいいけど、えん罪はちよっと後味悪いし」

「ルシフェルさん、悠理君を庇ってくれているんですか？殺そうとしているんですか？」

「半々ね。で、話戻るけど、尚武に泥棒っていうのは、本当なのね？」

「ああ。倉庫の換気口がこじ開けられていたそうや。だっけど、あんなちっぽな店、襲ったところで」

「それ、違う」

「？」

「あそこは元々、近衛の式典で使う儀礼刀まで作っていた所だから、刀もかなりのものが揃っているんだよ？」

「あんなちっぽけな所に？まさか」

「私の刀も修理で出したばかりだけど、その時は確か、国宝級の刀が倉庫にゴロゴロしてたんだもの。私、何振りか試しさせてもらったし」

「ホンマか！？」

「うん。近衛の倉庫に眠っていた刀、今、大量に尚武にあるんだもの。でも、それすら目もくれないなんて」

ルシフェルは、しばらく考え込んだ後、思い出したように言った。

「とりあえず、水瀬君をコンクリートから引き上げて。何か知ってるかもしれないから」

「えーっ！？このまま沈めちまえよ」

「ダメ。美桜さんが悲しむでしょ？」

「あの、悠理君の命の心配は」

「……そうね。香典、もったいないから、でいい？」

「……」

バシャバシャバシャ……ポチャン

南雲と秋篠が中庭にある大きな池の側を通りかかったとき、大きな水音がしていたが、まるで力尽きたように不意に止まった。

池の側には、ルシフェルが立っている。

「ナナリ、何をしている」

「あ、南雲大……じゃない、先生」

横にいた博雅の顔を見て、慌てて手にしたものをも後ろに隠すルシフェル。

「どうした？——ん？ワイヤーか？それ」

「え、ええっと、なんでこんなものが落ちているんだろうと思つて」

「バシャバシャやっていたものはなんだろうな。ルシフェル、何か知っているんじゃないか？」

博雅に問われ、慌てて否定するルシフェル。

「し、知らない！別に水瀬君を放り込んだとか、そんなのは……」

「いや、そうらしいな」

南雲の呆れた声に凍り付くルシフェル。

「え？そ、そんなことは——」

「じゃ、ナナリ、あれはなんだ？」

南雲の指さす先、そこには、ワイヤーで縛り上げられ、池に浮かぶ水瀬の哀れな姿があった。

「あ、あはははははっ！！」

「……」

「……」

二人の冷たい視線を浴び、わらってごまかそうとして大失敗したルシフェルは、小さくうなだれながら言った。

「ごめんなさい」

「生乾きのコンクリートを落とすなら、シャワー室でも使わせればよかったでしょう！？」

「えーんっ！ごめんなさいいっ！！」

放課後の生活指導室で、救急車で水瀬の搬送に付き添った南雲の代役として、泣きが入るまでルシフェルを延々説教しつづけたのは、博雅だった。

ただし―――。

説教が終わってから出てくるまでにかかった時間が1時間。

その間、説教が終わった二人がナニをしていたのか、それは誰にもわからない。

第四話 「闇から生まれし者」

「全く、ルシフェルさんがあんないたずら好きだったとは思わなかった」

「マトモはマトモなんだけど、ハメ外すとあだからねえ」

あきれが隠せない博雅と、しみじみとした口調の水瀬が、しょんぼりしながら後ろをついてくるルシフェルをちらりと振り返りながら話している。

「……反省してます」

「してもらわなくては困ります」にべもない博雅の言葉に、さらに凹むルシフェル。

「じゃ、今回の仕事はルシフェの仕事ね？」

「……う、うん」

「仕事？」

「行けばわかるよ」

●尚武

見舞いに来たという建前で訪れた三人は、客間に通された。

主の話によると、美桜は熱が引かず、悪寒に襲われているという。

「それが、奇妙な話でしてな」

すっかりはげ上がった頭をさすりさすり、主は話した。

美桜は、黒い靄のようなものに襲われたというが、それ以上のことがわからない。という。

「靄？」

「ええ。煙というか、靄というか。そんな感じだったと」

「ふうん？それで、近頃、変わった物を手に入れたとか、そういうことは？」

「いえ。せいぜいが近衛府から細工修理で預かったものを除けば、

せいぜいが水瀬様の」

「そう……誰かが個人的にとかも？」

「それはわかりませんが……」

主は、不意に思い出す所があったらしい。

「そういえば、孫が近頃、奇妙な物を集めていましたな」

「孫？」

「ええ。美桜の娘です」

「美桜さん、子持ちなんですか！？」

驚いたのは、意外にも博雅だった。

「え？ええ。来年少生です」

「ちなみに、美桜さん、今年おいくつで？」

「28でしたかな？それが何か？」

「い、いや、そうは……イデッ！？」

博雅は、尻に感じた激痛に言葉を止めた。

ルシフェルが力任せにつねり上げた痛みだった。

「で、その奇妙な物とは？」

博雅に代わって言葉を続けたのは、水瀬だった。

「白い石です」

「石？」

「はい。この店の敷地のあちこちで出るらしいのですがね？孫が

綺麗だからといって、拾ってくるんです」

「それ、ありますか？」

「孫に聞いてみましょう」

主は、そういつて席を立った。

幼稚園から戻ってきたばかりの孫をなだめすかして石の入ったお菓子の空箱を借りた主が戻ってきた時、客間は何やら騒ぎになっていた。

「この浮気者おっ！」

「ち。違う！ルシフェルさん！誤解だってば！」

「ル、ルシフェ、止め！」

どうやら痴話ゲンカのようなだ。

ドカバキグシャツ！

すごい音がしている。

「コホン」

主が咳払いをすると、騒ぎが収まった。

大柄な男の顔は、主が見る限り、平手打ちにひっかき傷が走り、加害者だろう女の子も、泣きはらした顔でうつむいている。

「よろしいですか？」

「は、はい……」

「どうぞ」

「ご迷惑を」

三人三様に、恐縮の体で主が座るのを待つ。

「こちらです」

「このサンマドロップの空き缶が？」

「ええ。集めた石を、孫がこの中に」

「開いてもいいですか？」

「どうぞ」

軽く振ると、それなりの石が入っているらしい。カチャカチャという音がした。

「……」

中から出てきたのは、「白い」というにしては、やや黄ばんだ感じのする

石だった。

「なんだ？水瀬、どこにでもありそうな石じゃないか？」

「そう思う？」

一つまみを博雅の手に、もう一つをルシフェルの手に乗せる。

「ルシフェは？」

「よくわかんないけど、でも、どこかで見た気がする」

「……そう。ま、そういうことだね」

「あの、それが何か？」

「いえ。お孫さんには、この石のかわりに、ビー玉でもあげてください。その方が喜ぶでしょう」

「は？はあ……」

「美桜さんにお会いすることは出来ますか？」

「少しくらいなら出来るでしょう」

美桜の様子を見えます。と、主は再度、席を立った。

「ルシフェ、最近、瀬戸さんが乗り移ってるんじゃない？」

「水瀬君が博雅君に乗り移っているんだよ！」

「恐いこと言うなよ……で？この石がなんだっていうんだ？」

「未亜ちゃん、前に話していたよね？昔、この辺で何があったか」

「あ？ああ、確か、火事とか殺人とか」

「そ。たくさん死んでる所。いわば曰く付きの土地。でね？そういう所で、大規模災害とかあるとね？時々、出てくるんだよ。こういうの」

水瀬は、ちらりとルシフェルの顔を見る。

「ルシフェ、もうわかった？」

無言で頷くルシフェル。

「わかりたくないけど、そういうこと？」

「そういうこと」

「どういうことだ？こんな石が」石の一つを手にとり、遊ぶように眺める博雅。

「石じゃないの」

ルシフェルは、博雅の手から石をとると、だまって缶の中に入れた。

「石じゃない？」

「そう」 答えるルシフェルは、真剣な顔で頷いた。

水瀬の顔を見る。彼もまた、同じような顔をしていた。

「じゃ、なんだっていうんだ？」

しばしの沈黙の後、水瀬が呟くように言った。

「人骨」

「じ、人骨？」

「そう」

「こ、これ、人の骨なのか！？」

「人の骨”だった”ものというべきかな」

水瀬はなんでもないといい顔で博雅に言った。

「陰陽五行の説って聞いたことない？」

「あ？ ああ、式典の関係で何度も耳にしたことはある。詳しいことは知らないが」

「やっぱり博雅君、知識が広いね。あのね？ この説によると、一般に魂と呼ばれるものは、あらゆる精神の根元である「魂^{こん}」と、肉欲や愛情といった欲望、そしてその欲を具現化する肉体「魄^{はく}」との2つから構成される。だから、魂のことを魂魄ともいうわけ。古典文学で時々目にする言葉だよね？」

「魂魄くらいは知っている。身はたとえ南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望まんとする。のアレだろう？」

「そ、そして、やがて肉体が減ぶ、つまり、死ぬ時、魂魄はその

肉体から解き放たれ、魂はふたたび天に還り、魄は地に還る」

「あの、つまり？」

「説明の途中」ルシフェルに窘められ、博雅は黙った。

「欲を司るのが魄だとしたら？死ぬ間際に強く願ったことを覚えているのもまた魄なわけでしょ？」

博雅は無言で頷いた。

「生きたい、死にたくないっていう想いもまた魂と魄のどっちが強く刻んでいるかといえば、魄となる。そして、魄は肉体とも強いつながりをもっているから、肉体に残る」

「よくわからんが、人の念が、魄として、肉体——この場合、死体か？そこに宿るといふか、残るわけだな？」

「まあ、そういうこと」

「博雅君、屍鬼って知ってる？」

不意にルシフェルが博雅に問いかけた。

「あ？ああ」

「屍鬼になる原因は、まだよくわかっていないけど、魔法に関わる者の間では、魄と屍鬼化する要素の関係が古くから言われているわ。死ぬ間際、本能的に願った生存への欲望を願う魄に影響を与え、肉体を屍鬼にしてしまう。って」

「この石も屍鬼も一緒ということか」

博雅は、水瀬が持つサンマドロップの缶を気味悪そうに見つめながら言った。

「その石、いや、骨は、死んだ人間の念がこもっている。それは魄のなせる技——か」

「簡単に言えばそうなるね。念が骨を石のようにしている」

「しかし」

博雅は、水瀬に訊ねた。

「それと美桜さんが倒れたのどう関係が？」

「靄だよ」

「靄？」

「そう。あれが何だったかで答えがわかる。まずは、美桜さんを何とかしなければね」

主に案内されて入った部屋には布団が敷かれ、美桜が横になっていた。

熱が引かないという主の事前の説明は正しいらしい。

見るだけで、水瀬にもルシフェルにも、美桜が倒れた理由がわかった。

部屋の空気がなんとなく重く湿った不快さに満ちている。

病人の部屋とはいえ、これは異常だった。

しかし、目下最大の問題は、床に伏す美桜のなまめかしさが倍增されていることだった。

上気した美桜の顔といい、汗で額に張り付いた艶めかしい髪といい、寝間着から伺えるうなじといい、何とも言えない色気が、博雅の心を支配し、ルシフェルの逆鱗に触れていた。

（きれいだ）と思う博雅。

（きけんだ）と感じるルシフェル。

（いい加減にしろ）と苛立つ水瀬。

（大丈夫か？こいつら）心配になる主。

「はしたない所をお見せして申し訳……」

なんとか起きあがろうとする美桜を心配そうに見つめるのは、幼稚園のスモックを着たままの女の子。

慣れない手つきで、何とか母の額にタオルを当てようと頑張っているけなげな姿が、ルシフェルの母性本能を刺激したのは事実だろう。

顔立ちが、なんとなく美桜に似ている気がする女の子の横に座り直したルシフェルが、女の子にかわってタオルを絞って手渡す。

「はい」

「あ、ありがとう」 見慣れない女からの手伝いに戸惑いながらもお礼だけはきちんといえるあたり、しつけはしっかりしているな。と、博雅はルシフェルに惚れ直しつつ、思った。

「本当に、お騒がせして」

母親の美桜は恐縮の体だ。

「いえ。そのまま横になっていてください」

「昨日までは何ともなかったのに……」 あれ”に出会ってから」

「魔素にあたったんですよ」

水瀬は、美桜の布団を直しながら、そう言った。

「魔素？」

「障気ともいいいますか。よくない気のことです」

ポウッ

水瀬の掌が金色に輝き出す。

「浄化します。そのまま目をつむって楽にしていってください」

「は、はい」

水瀬の掌が美桜に近づいた途端、部屋の中が真っ白になった。

「！！」

「きゃっ！」

「何と!？」

視界が戻ると、今まで通りの部屋に戻っていた。

「あ、あの……」

心配そうに目を開ける美桜。

「終わりました。あと一日、安静にしていってください。明日の朝

には元気になっているでしょう」

「ママ……大丈夫？」

心配そうに近づいてきた美桜の娘の頭を撫でつつ、水瀬は訊ねた。
「美桜さん？ 本当の所を聞きたいんですけど」

「は、はい？」

「昨晚、あなたは何をしていたんですか？」

「……わ、私は、別に、何も」

「別に怒りはしませんけど、この子が”あの鏡”の封を開けたんじゃないかなって」

「……！」

美桜の顔が真っ青になる。

それは、あきらかな肯定を意味していた。

意味を察した主は、顔を真っ赤にして怒鳴った。

「智代！ お前、お客様から御預かりした品を！」

「ち、違います！」

美桜が娘を庇いながら負けじと叫んだ。

「あ、あれは私が——」

「大丈夫ですよ」

水瀬が手を挙げて主を制しながら言った。

「誰が破っても変わりません。問題は、あの封印が破れたこと、そのものなんですから。——美桜さん。話して下さい」

美桜は、意を決して口を開いた。

智代を育てる上で、夜、あまり寝ないのが美桜にとって唯一に近い悩みの種だ。

しかも、智代は布団でじっとしているのが苦手らしく、あちこち歩き回るため、下手をすると夜中中、娘を捜して家捜しすることになる。

（困ったな）

夫から子育てについてとがめられこそしないが、それでも、仕事

で疲れている夫にはゆつくり休んで欲しいと思うのも、やはり妻として当然の気持ちだ。

「智代？出てらっしゃい！」

いい加減、語気が荒くなるのが自分でもわかるが、押さえられない。

夜中2時。

（お尻ぺんぺんしなくちゃ）

そう思いつつ、奥の倉庫へ続く廊下を歩く美桜の耳に、軽い足音が聞こえてくる。

（見つけた）

角を曲がった先。

そこは、お客から預かった貴重な品をしまう倉庫———というか、牢になっていた。

格子の隙間はそこそこあり、小さな子——智代のような子なら通り抜けることすら出来る。

今度、壁で塗りつぶすことになってはいるが、こう見るとやはり不用心ではある。

そして、娘は、いた。

格子戸に苦勞しながら、倉庫から出てきた娘は、何かを大事そうに手にしている。

「智代！」

血相を変えて怒鳴りつける美桜。

その声に驚いた智代の手から、”それ”は落ちた。

カランッ

乾いた音を立て、床に落ちた”それ”を驚いた顔で見る智代と、慌てて近づく美桜。

「こらっ！ここに来ちゃ行けませんって、何度ママに言われたの！？」

「……」

困った。という顔で母と”それ”を交互に見る智代。

「いい！？」

美桜は、智代の前にしゃがむと、真っ直ぐ智代の目を見ながら論じた。

「ここは大切な物がたくさんあって、一つでもなくなれば大変なことになるの。ごめんなさいじゃ、許してもらえないのよ！？」

「ご、ごめんなさい」

そう言った娘の目は、何故か何かに驚いたように見開いた。

「どうしたの？」

「マ、ママ……後ろ」

「え？」

振り向いた先にあった物。

それは――――

闇

いや。照明で辺りは照らし出されているはず。

なのに、そこだけが、闇になっていた。

そして、その闇は蠢いている。

（靄？）

目をこらしてそれを見極めようとした美桜目がけて、闇という靄が襲いかかり、そして、美桜は意識を失った。

「智代の鳴き声で、私らが気づいたんです」

主が言葉を続けた。

「駆けつけた時、すでに美桜は意識がなく」

「あの鏡”に、この辺の死霊の魄が反応したという所ですね」

「で、その鏡は？」博雅の質問に、主は首を横に振った。

「なくなっていました」

「でも、確か、聞いた話では、何も盗まれていなかったと」

「公には、です。手前共も信用商売です。例え一つでも盗難にあったとなると――」

「別にいいんですけどね」

耐えられない。という顔の主に、水瀬は涼しい顔で言った。

「いいわけが！」

「あれ、結構なくせ物で、ここでの修理が終わり次第、国立博物館に押しつけるはずだった代物だし」

「水瀬君、あの、6課のクミンちゃんが言っていた、いわくつきの鏡って、まさか」

「ルシフェ、その通り。あの鏡のことだよ」

「？」首をかしげる周囲に、フォローするようにルシフェルが言った。

「あのね？その鏡、トラブルになるようなら、破壊するように指示が出ていたの。だから、なくなろうがなにしようが、このお店の信頼には何も影響は出ないわ。むしろ、なくなったといえど、こっちから迷惑かけたってお詫びしなければならぬほどで」

「ほ、本当ですか！？」

主は血相を変え、ルシフェルにすがりつくように訊ねた。

「ほ、本当に、手前共の責任には！？」

「う、うん。大丈夫のはず。でも、鏡って、何なのか、私も知らないんですよね」

「“死鏡”っていったね？呪術に使われていた鏡だよ」

何でもないという顔の水瀬。

「呪具としては一級品だから、この辺の死霊が依代にしたかった

んだろうね」

「あ、あのさ……」

博雅は、あまりに淡々と事进行处理していく水瀬達に不安そうに訊ねた。

「それが、逃げ出したってことは、なんか騒ぎになるんじゃないか？」

「……」

「……」

「……」

「……なぜ、互いの顔を見合って、ここで黙る？」

「ルシフェ、お願い」

「い・や」

「今回、やるって約束でしょ？」

「死霊1000人でしよう？」

「多分、周囲のもつれてくるから、その倍くらいかな？」

「やっぱり、いや」

「ルシフェルさんでも、やっぱり、手に余るのか？水瀬、お前もかなりの使い手だと聞いているが、それでも、なのか？」

「ううん」

「違う」

二人は何でもない。という顔で否定する。

「じゃ、何だ？なぜ、嫌がる？」

「面倒くさい」(×2)

二人を相手にした博雅の説教が続いたのはいうまでもない。

第五話 「美奈子」

●翌日 明光学園 屋上

「といはっても、どうやって鏡を探し出すんだ？」

弁当を食べ終わった後、博雅から出されたもつともな質問に、ルシフェルはなんでもないという顔でいった。

「出方を待つの」

「向こうが騒ぎを起こすのを待つというのか？」

「そう。簡単でしょう？」

「しかし、それでは犠牲者が出る」

「最小限度に押さえるから」

「いいのか？そんなんで」

「他に方法がないもの。ところで博雅君」

「ん？」

「今晚、ヒマ？」

「あ？ああ。まあ、特に予定はないが……」

「一晚、付き合ってもらえる？」

「え、っ!？」

ルシフェルには食事まで世話してもらっているが、さすがにそれ以上の関係はまだだった。

その彼女に「一晚」相手を頼まれたのだ。

博雅は、その突然の申し出に、慌てて答えた。

「い、いや！ルシフェルさん、そ、それはちょっと早いんじゃない？」

「？」

「ほ、ほら、まだお互い学生だし、段々と付き合っていくうちに……」

「な、何……考えてるの？」

さすがに意味がわかったらしく、申し出たルシフェルの方まで赤面してしまう。

「そ、そういう意味じゃなくて」

「へ？」

「今晚位に、動き出すかもしれないの。だから」

「鏡が？」

「そう……」

ルシフェルの口が、小さく”エッチ”と呟いたようにみえたのは、博雅の思い過ごしではないだろう。

「わ、わかった。だけど、俺に何が出来る？」

「博雅君にしか、出来ないこともあるんだよ？」
「？」

●明光学園 教室

教室に水瀬の悲鳴が響き渡った。

クラスメート達は、ちらと見るや、”またか”という顔で無視を決め込んだ。

なんのことはない。

綾乃が水瀬の頬をつねり上げていた。

「美桜さんの所に行っていたそうですね」

「お、お見舞いに」

「私に無断で？」

「あ、綾乃ちゃん仕事でしょ？治療の必要もあったから」

「そんなのはお医者様の仕事です！」

「僕、療法魔導師の能力もあるし、魔素被害の可能性が――」

「私と同じじゃないですか！私だって昨日、仕事キャンセルする位、具合が悪くなったっていうのに！私の体調不良の治療が今朝まで延びたのは、そのせいなんでしょう！？」

綾乃には持病がある。

巫女の血を色濃く受け継ぐが故の持病。

魔素に汚染されやすい体質。

放っておけば精神的に破綻することもありうる。

それは水瀬も十分承知していた。

水瀬にとって、それはちゃっちゃと直せる代物と油断していたのも、携帯電話の電源が切れているのを忘れていたのも、事実だ。事実だ。

とにかく、結果として綾乃は朝まで放っておかれた。

水瀬が多忙なら綾乃もまだ納得のしようもあったろう。

しかし、優先順位を他の女に超されたとあっては、これほど面白くないことはそうない。

だから、綾乃は怒っていた。

「わ、忘れていたわけじゃなくて、いろいろと訳が」

水瀬にも言い分はある。

だが、水瀬自身、その言い分が、単なる言い訳としかとられないことは理解していた。

「どんな訳です？」聞く耳持たないという顔の綾乃。

「泥棒って話もあったでしょう？ 尚武は僕ん家も相当取引ある所だし、何かあると家の方でも迷惑するんだ。特に今、お母さんが何品か修理に出しているし、外に漏れるとまずいものがいくつもあるから……」

「御義母様の？」

義理の母が出てきた綾乃は、態度を幾分か軟化させた。

自分のために義母に被害が出たとなると、義理の娘としての立場が危うい。

そういう打算の末の判断だ。

「……仕方なく、なんですか？そうですね？」

綾乃かそう思いこむのはかなり無理があったが、あえてそう思いこむことにしたのは、そういう訳だ。

「そ、そうです」

「……浮気じゃなくて？」

「美桜さん、病人だよ？ルシフェルや博雅君だったし」
「……」

水瀬をにらみつけた綾乃は、しばらくの沈黙の後、言った。

「いいです。今回は大目に見ますが、せめて尚武さんで何が起きているのか、それくらいは教えて下さい」

「うん。あのね？」

水瀬はかいつまんで尚武の現状を話した。

「つまり――」

綾乃は言った。

「美桜さんは、魔素の被害を受けて寝込んでいて、悠理君達は、その現況である鏡を探している、というわけですか？」

「そういうことです」

「成る程」

美桜が既婚者であり、しかも子持ちであることを知った綾乃は、頭の中で美桜の立場を、危険人物から要注意人物へと格下げした。

「それで、水瀬君はどうするんです？」

「瀬戸さんと一緒にいる」

「えっ？」

心臓が高鳴ったのを、綾乃は確かに聞いた。

「わ、私と？」

「うん。危険すぎるから——えっと」

そういう水瀬は、カバンの中身をあさって、出てきた物を綾乃に手渡した。

「はいこれ」

「何です？」

手渡されたのはお守り。

なぜか「安産」と書かれていた。

「あ、あの……」

「？」

「わ、私別に妊娠しているわけじゃ」

「え？」

「な、何で安産祈願のお守りなんですか！？水瀬君、私の気づかないうちに、何をしたんですか？責任とって下さい！」

「え？ち、違う違う！多分、絶対、違うソレ！」

「じ、じゃあ、なぜ、安産祈願のお守りを！？」

「え？あ、中身は違うよ？袋が他になかっただけ。中身は対霊防御の護符の詰め合わせ」

年頃の娘が手にするだけで恥ずかしいお守りを見つめ直し、綾乃は抗議した。

全く、なんで悠理君は、こういうのはこんなに鈍いんだろう。

「も、もう少し、考えて欲しいんですけど」

「？よくわかんないけど、今回の敵に綾乃ちゃんが狙われる可能性が高いから」

「え？」

「鏡を使って霊達が強力な力を持ち始めている。霊達が具体的な依代を求めた時のことを考えてのことだよ。この辺で綾乃ちゃん以

上の霊媒体質なんて存在しないし、その存在に乗っ取られでもしたら」

「……」

綾乃もその意味はわかるし、なりかけた経験もある。

そんな時は、常に母によって護られてきたとはいえ、その恐怖まですでに忘れることはできない。

その恐怖が、綾乃の心を締め付けてきた。

「私、危ないんですか？」

「可能性は否定できないし、綾乃ちゃんは護らなければならないもん。大体、今回の事件、メインはルシフェルってことになっていくからね」

「じ、じゃあ」

「先生と事務所には話はつけてあるよ。今晚の撮影から、僕も護衛任務に就くことになるから。よろしくね」

「は、はいっ！」

（なんとかなるかな——ん？）

不意に、誰かの殺気に近い視線を感じ、水瀬は教室の中に視線を巡らせた。

（あれ？）

水瀬と視線があった途端、不機嫌そうに目をそらせた女子生徒がいた。

美奈子だった。

●葉月駅付近 某歩道

むしゃくしゃする。

予備校の小テストの結果は惨憺たるものだった。

学校の授業も面白くない。

部活は出たくない。

本は読みたいくない。

テレビなんて見たくない。

何もしたくない。

ただ、もう、何もかもがイヤだ。

むしろくしゃする。

予備校の帰り道、美奈子はやり場のない不機嫌さに支配されて歩いていた。

何でこんなに面白くないのか。

理由は簡単だ。

だが、その理由を、美奈子は考えたくもなかった。

普通に考えれば―――。

よく使われるフレーズだが、それすら、今の美奈子にとって拒絶の対象でしかない。

思考が停止した状態は、迷路の中をさまよい歩いているようなものだ。

歩くだけでストレスが溜まる。

そして、溜まりに溜まったストレスが、さらに思考を停止させてしまう。

完全な悪循環だ。

彼女は、それを突かれたのだ。

●同じ頃 某スタジオ 楽屋

「つまり、その鏡は、呪具なんですね？」

「そう。春に新井君達を襲ったのと似たような物。ただし、こっちのほうが年季が入っているし、性格が悪い」

「というと？」

「呪具は道具でしかないはずなのに、道具が主になるんだよ。うんとね？春のは、持ち主と契約関係を結んで、その代償として、主は破滅したとしても、それは主の意志の結果なんだよ。主が望んだことの代償としての破滅だからね。でも、今回ののはそうじゃない」

●葉月駅付近 某歩道

外灯の下に何か落ちている。

美奈子はそれに気づいたものの、興味はない。

はずだった。

だが、それは、美奈子を誘うように外灯の光を反射し続けた。

「？」

それは、古びた鏡だった。

●同じ頃 某スタジオ 楽屋

水瀬は綾乃の手作りのクッキーを食べながら続けた。

「モグモグ——道具の目的は、道具の使い手に乗っ取って、自分が主になること。自分が主になることで、呪いを現実起こそうとするんだ。そこに、主の意志は関係ない」

「道具が道具じゃなくなるってことですか？」

「そう。道具が主人に、主人が道具——ううん。道具以下になる」

●葉月駅付近 某歩道

（鏡や櫛は拾うもんじゃないよ。縁起が悪いからね）

死んだおばあちゃんがそういつていた。

そういうものだと思ってたし、そう思う。

普段はそんな美奈子だったが、しかし……。

立ち止まった美奈子は鏡に手を伸ばし——

●同じ頃 某スタジオ 楽屋

「もし、鏡を手にしたら、どうなるんですか？」

「その時点で鏡の道具になる。道具になったが最後、死ぬまで道具。というか、鏡は死霊の集合体。そんなものに乗っ取られたら精神が破滅するよ」

いいつつ、ポケットから水瀬が取り出したのは一枚の呪符。

「それは？」

「前にみんなにあげた御符。憑依に対抗できるし、今回の鏡にも

対抗できるほとんど唯一の手段。こんなでもなければ絶対助からない」

不意に鳴り響く携帯電話の呼び出し音。

ルシフェルからだった。

「はい水瀬——え？動いた？……で？……反応が出て、すぐ消えた……うん。うん。わかった。こっちも警戒する」

「動いたって、鏡ですか？」

「うん。大丈夫。綾乃ちゃんは僕が護るから」

「はいっ！」

その綾乃の安堵は、翌日には消えた。

家族から届け出が出され、学校も動いた。

教室では、HRの時間、クラスメートに告げられ、心当たりは残さず申告するよう通達が出された。

搜索願

対象

桜井美奈子

「ね、ねえ！水瀬君、だっ、大丈夫だよ？ね？ねえっ！」

HRが終わった途端、水瀬にすがりついてきたのは、未亜だった。

「未亜ちゃん……」

「ねえ！大丈夫でしょ？すぐ、何もないって顔で、学校来るよね
!？」

未亜の瞳からは涙がこぼれ落ちる。

「うん……大丈夫だよ。きつと」

「そうだよ？そうだよ」

きつと。

水瀬はこの言葉が嫌いだ。

希望的観測がいい結果をもたらしてくれたことなぞ、経験したことがない。

ルシフェルもそうだ。

きつと生き残っていてくれる。

そう言われて、生き残っていた者などいなかった。

彼女も水瀬も、一年戦争でいやという位、味わったことだ。

生き死にの世界で、根拠のない希望なんか持つな。

それは、確かに辛い、真実の教訓だ。

だが、それを普通の女の子に諭して、それで何が得られる？
女の子を絶望に追い込んで、何が得られる？

何もない。

水瀬もルシフェルも、そこまで冷酷ではない。

泣き崩れた未亜をクラスメートの女の子達に委ね、二人は教室を出た。

クラスメートで、二人に声をかける者はいない。

クラスメートがかけているのは、二人への期待、ただそれだけだ。

模範生である美奈子の失踪が騒ぎにならないはずがない。

しかも予備校帰り、今日は報道部の大切な会議の日。

失踪する理由はどこにもない。

「まさか、こうなるとは思わなかったね」

「うん」

図書館の閉架図書室。

使われていない閉架図書室は、水瀬達魔法騎士用にあてがわれた部屋。

いつも二人が密談に使う場所だ。

緑茶を煎れながら、ルシフェルは言った。

「呪具が肉体を乗っ取ったのはいい。だけど、反応がないなんてありえないわ」

「コンシールにしているにしても反応が出ないのはおかしい」

「四月にあった呪具の事件以降、葉月市内に警戒網張っているっ

て聞いていたけど」

「たいしたことがないのか、呪具がすごすぎるのか——」
水瀬は葉月市の地図を広げてため息をついた。

「軍事施設に工場に、居住区まで、隠れるところには事欠かないし、葉月市、広いんだよねえ」

じっと地図を眺めていた水瀬が言った。

「ねえ、ルシフェ」

「ん？」

「ルシフェが、呪具だったとして、葉月のどこに隠れる？」

「そうねえ……」

ルシフェルは、お茶を片手に地図をしばらく眺めた後、言った。

「理由によるわね」

「理由？」

「そう。ただ逃げるだけか、目的があるか」

「ただ逃げるだけなら？」

「自分が目立たない所。よく言うじゃない。本は本棚につて」

「ゴミは指定の日に——なるほどね。具体的には？」

「市販の地図より、こっちの地図の方が役立つんじゃない？」

ルシフェルが本棚から取り出したのは、カギのついた筒。

「うーん。やっぱりねえ」

筒の中には地図が入っていた。

ただし、地図には「極秘」という朱印が押され、葉月市が細かく色分けされていた。

近衛が作った葉月市の魔素分布図だ。

「昨日、探したのはどの辺？」

「ここから、ここ。軍港前広場から月ヶ丘公園だから、南側半分ね」

「ふうん。——で、僕がNTVのある中央から綾乃ちゃんの家のある神代田までだから北半分だよね？」

「となると、東か西か」

「手分けして探す？」

「てっとり早いけど、メドはつけておこう」

「メド？」

「危険地帯」

水瀬が指を指した地図上の箇所は、赤く塗りつぶされている。

「魔素危険地帯」

「そ。ルシフェ、ここところは潰してくれた？」

「うん。感知呪符貼り付けておいたから、反応が出るようにした」

「さすが。もともと魔素が強い所じゃ、隠れても感知出来るはずがないもんね」

「でも水瀬君」

「ん？」

「反応が出たのが、小谷——中央の隣でしょ？すぐに反応が消えたということは、小谷周辺じゃない？移動の反応がほとんどなかったし」

「なるほど」

「でも、危険地帯はないよね」

「魔素の感知がエラーを起こす原因は？」

「えっと、強い電磁波とか」

「そう。ここ」

水瀬が指さした先。

そこは、ラジオ局だった。

「……」

なぜか、指さす水瀬は凍り付いた。

「水瀬君？」

「すっごくヤバイ」

席を立つ水瀬の顔は青ざめている。

「？」

「相手は呪いのプロだよ？僕達、勘違いしている。敵は、ただ隠れているんじゃない。チャンスを狙っているんだ」

「……まさか」

察しが付いたルシフェルも青くなった。

「呪いを広めるのに、電波を利用するつもり？」

「そういうこと！」

「どうする？」

「音源兵器連れてきて！」

水瀬は携帯電話を手にしながら言った。

「連絡はしておくから」

「わかった」

明光学園からラジオ局まではバスで10分ほどだ。
バスに乗り込んだのは、水瀬にルシフェル、そしてなぜか博雅だった。

「ち、ちょっと待て！水瀬、どういうことだ！？」

「手を貸して」

「授業中だぞ！？」

「サボるのもいいもんだよ？」

「いい訳ないだろう！？」

「公共交通機関で大声出さない」

「う、っ……」

ガラガラとはいえ、さすがに博雅は小声になった。

「せめて訳位教えてくれ」

「博雅君の笛が必要なんだ」

「？昨日の晩みたいに？」

「演奏中、ルシフェルがべったりっていうのはないけどね」
ガンッ！！

鈍い音がして、水瀬は黙った。というか、沈黙させられた。頭には大きなタンコブが出来ている。

痛む拳をさすりながら、ルシフェルが続けた。

「コホン。美奈子ちゃんを助けるのに、どうしても力が必要なよ」
「昨日の話では、敵は笛の音に弱いってことだったよね？」

「うん」

「だったら、家に寄ってくれ。笛は」

「ここにあるから」

どこから取り出したのか、ルシフェルは豪華な錦織の包みを手渡した。

「開けていいのか？」

「うん」

不思議なときめきを感じながら、博雅は包みを開ける。

包みの中身は、古ぼけてはいるが、かなり手の込んだ箱があった。蓋を開ける。

「笛——か？」

「そう。葉双^{はふたつ}」

「えゝ!？」

「楽聖と呼ばれた源三位博雅の所有していたというアレ」

「あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ」

いつの間にか博雅は箱の中身を拝みだしていた。

「あゝ、あゝ、の、ルシフェル？こ、これ、どこで、どうやって？」

「近衛府の雅楽寮から借りてきたのよ」

「だっ、だだだだだっ、こここここれ、これは、帝国博物館に」

去年、博物館秘蔵展に展示された葉双を見るため、博雅は受験勉強を放り出して何度も通っていた。

いわば神にも等しい品。

博雅の顔は青ざめ、滝のような脂汗がしたたり落ちる。

「あれ？レプリカよ。こういう値打ちモノを、持ち主がそう簡単

に手放したりしないもの」

「持ち主はともかく、おい——本当に、これを吹くのか？俺が？」

「音が出たらね」

「？」

「玄象じゃないけど、その笛もかなり吹き手を選ぶんだよ。だからお蔵入りしていたの。たしか、晴菜親王くらいじゃないかな？今、それ吹けるの」

晴菜親王——。

現代の楽聖とされるほど、雅楽の分野では天賦の才に恵まれているとされるまさに天才。博雅より年下だが、雅楽の世界では、その若さと身分に関係なく、世界的に高い評価を受けた存在。

そして、奏者を選ぶことに關しては類を見ないとされる玄象を難なく演奏してのける唯一の雅楽奏者だ。

「お、俺に吹けるのか？」

「やってみて、ダメならまた考えるよ」

F M 葉月

地方ラジオ局だが、東京近県に幅広リスナーを擁し、ことアナウンサーやDJは中央のメジャーなラジオ局すら質的に凌駕する、全国的に知られたラジオ局だ。

局の隣にはコンサートなどで利用される多目的ホールがあり、綾乃のコンサートなども頻繁に行われている。

「やっぱり、ここにいたね」

ラジオ局に入るなり、水瀬とルシフェルは顔を見合わせた。

ラジオ局の発する電磁波で増幅させているらしい魔素の濃さに、息が詰まりそうになる。

「お、おい……こりゃ、何だ？」

博雅が口を押さえながら聞いてきた。

「別に臭うわけじゃないが、なんだか気分が悪くなる。ラジオ局って、こんなものなのか？」

「普通は違うと思うけど、感じ方は正しいよ」

「水瀬君、地下だね。これ」

「うん。えっと」

壁に張り出された施設の見取り図には、地下は書かれていない。

「ラジオ局には圧力かけてある。地下には誰もいないはず。非常口から入れるよ。行こう」

ボイラー室や発電室が設置されている地下は迷路のようになっていた。そして、居合わせたのは人ではなく、妖魔だった。

「歓迎はされていないわね」

「うん——博雅君」

水瀬は刀を博雅に手渡しながら言った。

「御免。自分の身は自分で守って」

「わかった」

博雅は刀を抜く。

（真剣——か）

生まれて初めて何かを倒すために抜く。

その善悪は、わからない。

鈍い光を放つ刀身をしばらく見つめた後、博雅は無言で刀を腰に差した。

「ルシフェ、博雅君の護衛最優先、敵の潜伏地点を割り出す。それでいい？」

「了解。取りあえず、博雅君。刀の前に」
ルシフェルが言った。

「笛、吹けるか試してみたら？」

「あ、ああ」

博雅——。

かつて、平安の世にそう呼ばれた男がいた。

楽の天才と呼ばれ、数々の伝説に彩られた男がいた。

そして、そんな男に憧れ、近づきたいと願い、その名を自らの孫に、その想いと共に名を託した男がいた。

託されたのは自分。

博雅にとって、その名は重荷であり、また誇りでもある。

楽は好きだし、むいていると思う。

だが、その名にふさわしい程の才能が、自分にあるか？

そう、自問すると、辛い。

誰も比較しようがない。

比較出来ないのは当然だ。

だが、比較してみたいと思うのも、ある意味で当然だ。

じつと葉双を見つめた博雅は、心を落ち着かせながら口を付けた。

ひんやりとした感覚が、全身を引き締める。

笛

それは単なる楽器

人

それは単なる奏者

葉双

それは楽器にして楽器にあらず

博雅

それは人にして楽器

地下室に、楽の音がゆるやかに、包み込むように流れ出した。

三人に襲いかかろうと身構えていた魔物達が、動きを止めた。

魔物達を労るかのように、慰めるように、楽の音は全てを包み込む。
む。

博雅は、葉双を手放そうとはしなかった。

ただ、水瀬達に誘われるままに、地下室の奥へと歩き出す。

三人が、戦うことなく、魔物達の包囲網すら突破し、目的地にたどり着けたのは、まさに博雅と葉双のなせる技だ。

予備通信室

魔物達の包囲の向こうには、そう書かれた部屋があった。

水瀬は扉を開けた。

第六話 「地下」

●秋篠博雅の日記より

男である以上、どうしても好きになれない言葉は、誰にだっていくつあるだろう。

俺の場合、その中でも「足手まとい」と言う言葉がそれだ。特に、「惚れた女の」という形容詞がつく時は特に……。

●ラジオ局地下

―俺は神経がどうにかなったのではないか？

博雅は笛を吹きながらそう思わずにはいられなかった。

まさに異形のモノ達。

そいつらが、自分の笛に聞き入っている。
いや、笛に、か。

そう。

自分の実力ではない。

ただ、こいつらは笛の音が好きなんだ。
だから、聞き入っている。

博雅には、そうとしか思えなかった。

他に説明の付けようがないだろう――と。

自分に笛を託した二人の姿を見る。

すべては、この二人に任せる。

博雅はすでに覚悟を決めていた。

俺は、あくまで笛を吹くだけ。

それでいい。

死んでも、この二人の足手まといにだけはなるまい。

剣の実力は、こいつらの足元にも及ぶまい。

魔法の力もない。

せいぜい、こうやって笛が護ってくれる程度だ。

なら、そんな俺が出来ることは、その程度だ。

そう割り切りつつ、博雅は、それが無理なことをどこかで理解していた。

ギイツ

第一緊急時放送室

そう、書かれたドアを水瀬が開けた。

大規模災害などで通常の放送施設が使えない非常時に備え、放送

局にはこういう施設があるとは、博雅も聞いている。

ドアの向こう。

非常灯に照らし出された室内は、薄暗く、空気が黴臭く澱んでいる。

広さは20畳はあるだろう。

―意外と、広いんだな。

博雅は、曲を変えながら辺りを見回した。

壁には、びっしりと人の顔が張り付き、自分達を見めている。

そして、部屋の一番奥に、彼女がいた。

美奈子だ。

虚ろな目

やつれた表情

投げ出された手足

果たして、生きているのかさえ、わからない。

ただ、無事でいてくれ。

そう、祈るしか、博雅には出来ない。

美奈子の手には、古い鏡が握られている。

それを確かめた水瀬がルシフェルと目配せし、うずき合った瞬間、すべてが動いた。

水瀬の手から光の矢が放たれ、美奈子を襲う。

ギインッ！！

耳障りな金属音が室内に響き渡った。

美奈子の前に展開された不可視の楯が、水瀬の攻撃を防いだのだ。放心状態の美奈子には、何かが取り憑いている。

魔力のぶつかり合いに反応したのか、壁を埋め尽くしていた顔が、一斉にうめきだす。

ほら、俺の実力はこの程度だ。

博雅は落胆しつつ、笛を吹き続けた。

本物の博雅なら、こうはならなかったろう。

きつと、もう、こいつらは成仏しているはずだ。

そう、ならなかったんだから、俺は博雅を名乗る実力はない。

「笛を続けて」

ルシフェルが言った。

「この人達、笛を聞き続けていたいのよ。でも、それを邪魔されたことを怒っている。だから、続けて」

返事の代わりに、博雅は、笛を続けた。

他に出来ることは、ない。

「耳障リダ」

金属をこすりあせたような、嫌悪感しか感じない声がした。見ると、美奈子が立ち上がっていた。

焦点の合わない目、憎悪に満ちあふれた顔。

それは、博雅が見たことのない美奈子だった。

「笛ヲヤメロ」

美奈子の手から魔法の矢が飛び、ルシフェルの楯がそれをはじき飛ばした。

「ナラ、コウシテヤル」

美奈子が大きく右手を振り上げた途端、室内の音が消えた。

笛の音も、何の音もしない。

―沈黙の呪法

魔法の一種で、音を奪う魔法が存在する。

それがこれなんだと、博雅にも凡その察しは付いた。

聴覚が奪われたような奇妙な感覚の中、博雅は確かに見た。

壁からは次々と顔が、腕が、肩が、はい出してくる。

まるで、ホラー映画のワンシーンだ。

―あれの時は確か、テレビだったか？

とっさに博雅の前に出たのは、ルシフェルだ。

ルシフェルの手から、光の粒子がシャワー状に放たれ、異形のモノ達を直撃する。

シャワーを浴びた異形のモノ達は、次々と乾いた土塊として崩れ落ちていく。

それは、圧倒的な力だった。

――これが、魔法の力か

壁からはい出ようとした異形のモノ達を、ほぼ一瞬で掃討したルシフェルは、開け放たれたドアから、室外に飛び出した。

博雅も慌ててそれに続く。

何が出来るわけではない。

だが、ルシフェル一人を死地に追いやるようなマネは、男として絶対に許されない。

抜刀したルシフェルは、舞った。

——かつて、芸者とは、武芸者を指した。

博雅は、そう聞いたことがある。

武闘が舞踏に通じるという話を、博雅は信じようとはしなかった。芸はあくまで芸であり、武は武だ。

そう思っていた。

だが、それは今、崩された。

それは、華麗な舞。

ルシフェルの舞は、至上の芸術にして、破壊によって彩れる芸という名の武。

絶対的な破壊。

博雅の目の前にいるのは、この世で最も洗練された剣の舞い手。

次々と撃破される敵ですら、ルシフェルの舞に華を添える脇役ではない。

祈るように高く掲げた刀から繰り出されたのは、逆袈裟斬り。

緩やかに振り下ろされる、唐竹割の一撃。

滑らかすぎるので、ゆっくりと振り下ろされているように見えるが、実際には、9割方が、視覚からの入ってくる情報のうち、欠落しているものを、脳が勝手に想像で補っているからにすぎないことを、博雅は理解していた。

実際、上位レベル騎士の博雅の動体視力をもってしても、ルシフェルの太刀筋が見えない。

見えてる。そう、勝手に判断していることを博正自身、認めずにはいられないのだ。

そして、舞は終わった。

それは、ドアの向こうを埋め尽くしていた異形のモノ達が全滅したことを意味した。

わずか1分足らずのことだった。

シュンッ

ルシフェルの霊刃が消える音だけが、至高の芸術が披露された通路に余韻として静かに響き渡る。

そして、博雅は気づいた。

音が聞こえる。

慌ててルシフェルに駆け寄ろうとして、博雅は自分の失点に気づいた。

——笛が吹けるじゃないか！

肝心の所で、何も出来なかった博雅は、深く悔やんだものの、後の祭りだった。

「大丈夫？」

心配そうに声をかけてくるルシフェルに、何と答えて良いものか、博雅は返答に窮してしまった。

●水瀬悠理の日記より

ルシフェが部屋から飛び出して通路を確保に向かった。

やっぱり、ルシフェは状況の把握が早いので助かる。

その間に、僕は桜井さん——ううん。死鏡にむかった。

「ねえ、破壊されなくなったら、おとなしく、その子を解放して」返事を期待したつもりはない。

そんなつもりがないことはわかっているから。

言うだけ無駄な気はするけど、一応、言っておいた。ただそれだけ。

「フザケルナ」

金属っぽい声で桜井さんが不機嫌そうに言った。

ほらやっぱり。

「折角手ニ入レタ依代ダゾ。タダで手放スト思ツタカ」
うーん。

カタカナで書くの面倒くさい。

よし。ここは普通の表現に変更してあげよう。

どうせ日記だし。

「貴様こそ、この娘の命が惜しければここを退け」
変なこと言ってきたから、正直に答えてあげた。

「別に？」

「!？」

「桜井さんでも誰でも、死んだからって、だからそれが何？」

「……死の意味を考えたことはないのか？」

「人間、いずれは死ぬんだよ？桜井さんは、それが早まったただけじゃないの？死に意味なんてあるの？」

ザワザワザワ

死鏡に依る死霊達が騒ぎ出す。

何故か、怒っている。

「死を望む者なぞおらん！」

桜井さんは叫んだ。

「死は押しつけられたものだ！死を押しつけられ、全てを奪われた者の無念さ、貴様のような愚物にはわかるまい！」

「わかってほしいの？ならそう言ってよ」

この鏡、何を言っているんだろう。

「わかるのか？」

「多分……」

一応、考えてから、言った。

「無理」

死ぬ？

死？

そう。死ぬこと。

生まれれば避けて通れないこと。

強くても、弱くても、お金持ちでも、貧しくても、避けて通れないこと。

戦争中、たくさん人が死ぬの見てきたけど、それに意味があるなんて考えたこともなかった。

ただ、人がいなくなるだけ。

二度と、その人と会えなくなる。

それだけだ。

死は、それだけのこと。

でも、こんな感じで、はっきり言われると、どうなんだろうって思う。

死に意味なんてあるのかなあ……。

よくわかんないな。

「だから、腹が立つからって、そんな鏡に取り憑いているわけ？」

「死者の無念を、誰も、誰も！神仏すら晴らしてはくれん！ならば死した者である我らが晴らさねばなるまい！それこそが死した者の大儀だ！違うか！」

「――それと、桜井さんを解放しない理由がどうして繋がるの？ほんと、よくわかんない。

哲学上の問題じゃないの？そんなもの。

「大儀のための犠牲だ！この者の魂は、いずれ我が仲間となる！ならば問題はなからう！」

「ということは、僕が桜井さんごと、君を破壊しても、何も問題ないんじゃないの？桜井さんは、君たちの仲間の予備軍なんだし」

「き、貴様！人の道理を知らないのか！？」

「……あんまり」

気にしていること、はっきり言わないで欲しいな。

確かに、僕は、みんなが当たり前前と思うことが、何で当たり前前な

のかわからないことが多い。怒られて、初めてそれがそういうものだとわかることばかりだ。

それはそれで気にしているんだよ？

「死ね！死んで我らの仲間になれ！そのひねくれた根性をたたき直してくれる！」

死鏡は、そう言い放つと、僕目がけて攻撃してきた。

普段、桜井さん私刑というか処刑を受けた身としては、「死鏡の攻撃」より、「襲いかかる桜井さん」の方が圧倒的に恐い。

距離は約3メートル。

予備動作なしで桜井さんは一気に間合いを詰め、僕に殴りかかってきた。

でも、遅いんだよね。

普段の桜井さんのでたらめな強さもないし。

こんなんじゃないやあ……ねえ？

僕がやったことは少しだけ。

桜井さんをおかわし、体勢を入れ替えると、桜井さんを羽交い締めにして

、死鏡を魔法攻撃で破壊した。
それだけだ。

……え？

鏡は一瞬にして粉々。
本当に塵になった。

あっけないなあ……。
つまんない。

本当につまんない。

死鏡は粉々。

確かに粉々にした。

桜井さんの手には、傷一つない。

でも、なんだろう。

この欲求不満に近い感情は――。

●一週間後

美奈子は未だに入院したままだ。

死鏡に取り憑かれた影響で、精神面、こと、記憶の面でかなりの混乱を引き起こしていめた。家族や未亜のことはわかったが、自分が誰なのかといった根本的なことを覚えていなかったのだ。

「記憶喪失というより、一時的な記憶の混乱だとは聞いている」

心配のあまり電話してきた綾乃に、水瀬はそういった。

「段々、記憶が戻り始めているそうだよ」

「じゃあ、すぐに元通りになるんですね？」

「ううん」水瀬は首を横に振った。

「え？」

「心のどこかで思い出すことを拒否していることまで、思い出させることは出来ないらしいんだ」

「つまり、心が思い出すことを嫌がっているようなことを、ですか？それならそれでいいじゃないですか？」

「うん……」

水瀬は落胆したような声で頷いた。

「水瀬君？どうしたんです？その記憶に、何か心当たりが？」

「思い出すのを嫌がっていることってね」

「？」

「僕のことらしいんだ」

美奈子は心の奥底で、水瀬に対する記憶に封印のカギをかけてしまっている。

そのカギを開くのは、本人しかない。
つまり、カギは開かない。

数日間は、親や未亜といった、患者が安心する相手を除き、一般的な面会謝絶がかかっていた。

それ解けたのは、入院してから6日後。

その日、水瀬はルシフェルや未亜と一緒に見舞いに行った。

あの一件以来、水瀬達が美奈子に出会うのはこれが初めてになる。

「やつほお！美奈子ちゃん！元気い？」

未亜にもそんな声が周囲の患者に迷惑だとはわかっていた。

慣れない入院生活で気落ちしていた美奈子に、少しでも明るくなつてほしい一心で、あえて道化を演じていた。

美奈子にもそれはわかっていた。

だからこそ、普通に反応した。

「こらっ！未亜！周りの迷惑よ！？」

「美奈子ちゃんだってそんな大声じゃ、迷惑だよお」

「まったく」

水瀬は、美奈子に声をかけようとして、タイミングを逸した。
美奈子の視線に、違和感を感じたから。
その視線は、その表情は、クラスメートを見る時のそれではなかった。

奇異が含まれていたのだ。

「……」

言葉に詰まる水瀬。

美奈子は未亜に言った。

「未亜？ お友達、連れてきたの？」

「……へ？」

目を点にして凍り付く未亜。

「かわいい子じゃない。何年生の子？」

「やっ、やだなあ！ 美奈子ちゃん！ マジボケしてんのお！？ 水瀬君じゃない！」

「みなせ……？」

「そ！ 美奈子ちゃんの彼氏！」

「私の？」

きょんとした顔の美奈子を、見るのが辛かった。

あの鏡、とんでもないことしてくれたな。

水瀬は、内心で舌打ちした。

「やだなあ、未亜、私、レズじゃないよ？女の子と付き合う趣味なんてないもん。何の冗談？」

「み、美奈子ちゃん？」

言葉をつなげようとする未亜の肩を掴むと、水瀬は未亜を病室の外へ連れ出した。

「み、美奈子ちゃん！水瀬君だよお！美奈子ちゃんが大好きな！美奈子ちゃんが毎晩オカズにしている！美奈子ちゃん！美奈子ちゃんてばあ！」

未亜の肩は震え、顔は涙でボロボロだった。

引きずられていたとはいえ、病室で泣き崩れなかっただけでも、よくもったと褒めてやるべきなのかもしれない。

未亜はドアに寄りかかるようにして崩れ落ちた。

「美奈子ちゃん、ヘンだよお……盗聴器で毎晩記録とってるんだよお？水瀬君の名前、何度も言い続けてたの、知ってるんだよお……？」

「何をいいたいのか、聞かないけど……未亜ちゃん」

顔を上げた未亜の目に走ったもの。

それは、憎悪。

いつもの興味津々の瞳が放つ光は、どこにもない。

純粹な憎しみが、未亜の瞳から放たれる光のすべてだった。

パンッ！

未亜の平手が水瀬の頬を打つ。

「水瀬君の嘘つき！」

未亜は涙に曇る声で水瀬をののしった。

「大丈夫っていったじゃない！何でもないって顔で学校に来るって！」

「……ごめん」

「戻して！」

水瀬の両肩を握りしめ、未亜ははげしく水瀬をゆすった。

「戻してよ！美奈子ちゃんを戻して！すぐに！今すぐ！ねえ！」

「……」

水瀬は、視線をそらせた。

未亜の顔を見るのが、つらすぎた。

「魔法、使えるんでしょ！？すぐに直してよ！美奈子ちゃんを直して！」

未亜もそれが精一杯だったらしい。

それだけ言うと、未亜は声を上げずに泣き出した。

「未亜ちゃん……」

ルシフェルが、そっと未亜を立ち上がらせると、ちかくのベンチに座らせた。

「水瀬君。主治医の先生に、今のこと、教えてあげて」

「……うん」

水瀬は、痛む頬に手をやりながら、ナースセンターへむかった。痛みが、心に楔となって打ち込まれたようだった。

一時間後――

「あれは、記憶の混乱ではありません」

精神科の医師は、水瀬達に言った。

「あれは、むしろ、本人が記憶を思い出すことを拒絶しているんです。一種の防衛本能というべきでしょうな」

「防衛本能？」

「そう。心当たりはありませんか？水瀬悠理という名に、相当な拒絶感を持っています。心を傷つけないが故に、その名を、そ

して、その存在を、患者は拒絶しているんです」

「そんなこと、あり得るんですか？」

「現に、患者がそうなっていますよ」

そういうことだった。

「そういう、ことですか」

「そういうこと」

「……」

「……」

しばしの沈黙の後、綾乃は言った。

「でも、美奈子ちゃんは学校に来られるんですよね？」

「？うん」

「じゃ、いいじゃないですか」

「え？」

「また、一から友達になり直せばいいだけ。そうでしょう？」

「そう、だね」

水瀬も無理矢理そう思うことにした。

「あーあ。今までの数ヶ月は何だったんだろ」

「さあ？」

綾乃のいたずらっぽく笑う声が、不思議と水瀬の心を落ち着かせた。

「今度会ったら、初めましてっていわなくちゃ」

名残惜しく携帯を切った綾乃は、目の前に映る女の子が大嫌いになった。

顔にこそ出さないが、その心が、最大のライバルの脱落を祝福しているのがわかるから。

心にカギをかけたなら、永遠にかけたままにして欲しい。

そんな卑しい心の持ち主なんて大嫌いだ。
そんな心の持ち主が、水瀬君の妻の地位につくなんて間違っている。

そう思った綾乃は、鏡に映った自分の顔に舌を出してから楽屋を出た。

「あら？」

美奈子の病室からの帰り、未亜は女医に声をかけられた。
ふとしたことで顔見知りになった産婦人科医だ。

「あ？先生、仕事ですか？」

「ええ。お見舞い？」

「うん。あのね？」

未亜は掻い摘んで事情を説明した。
その途中。

「尚武の？」

女医は奇妙な声をあげた。

「美桜さんに子供？いるわけじゃないじゃない」

「でも、みんなは美桜さんの子供だって」

「美桜さん、私の患者なのよ？ここ2・3ヶ月、見てないけど」

「子育てに忙しいからじゃないの？」

女医は、少なくとも、未亜にとっては信じられないことを言った。

「逆よ」

「逆？」

「美桜さんがここに来たのは、子供がいらないから」

「――へ？」

「美桜さんはね？不妊治療でここに来ていたのよ？」

未亜は、病院を走った。

携帯をかけるために。

水瀬に、このことを告げるために。

未亜は思った。
戦慄した。

みんなが見た子供って、誰なんだ？
尚武に入り込んだのは、人間なのか？

未亜は後ろを振り向かなかった。
何かが、後ろから追ってくるような気がした。

第七話 「記憶」

未亜は走った。

後ろを振り向かない。

決して振り向かない。

後ろで聞こえた鈍い音。

原田先生の悲鳴。

鈍い音。

それが何を意味するのか、考えたくないから。

エレベーターは使わない。

こんな時、密室に閉じこめられるのはゴメンだ。

絶対、エレベーターの箱が、棺桶になるから。

未亜は、非常階段の手すりに座ると、螺旋状の階段を、一気に一階まで滑り降りた。

無意識にポケットの中に手が入る。

（念のため、渡しておくね）

ポケットから取り出したのは、お守りだった。

学園七不思議騒ぎの前にもらった魔よけのお守り。

（低級なユーレイなら、近づくどころか、未亜ちゃんの前に姿を現すことも出来ないけど……）

あの時、水瀬は言っていた。

（気休め程度にしておいてね）

今は、気休めにもならない。

これが、私を護ってくれる全てなんだ。

それでも、お守りの加護ですら、後ろの存在には無意味に近いことを、未亜はどこかで理解していた。

非常階段のドアを開き、一気に玄関を駆け抜ける。

何かが、後ろからついてきているのがわかる。

ただ、それが何なのかまでは理解したくない。

未亜は震える手で携帯のボタンを押す。

設定を細工し、1を押すだけで水瀬、2でルシフェルの携帯へつながるようにしてある。

こういう時のためだ。

彼らが間に合うのか、それまではわからない。

未亜に出来ることは、彼らが間に合うことを祈るだけだ。

薄暗い外灯しかない闇の中、未亜は賢明に走った。

駅まで300メートル。

最悪、そこまで行けば、人もいる。
交番だってある。

そこまで持てば、最悪でも―――。

最悪？

これだって十分、最悪だ！

毒づきながら、短縮の1を押した途端、未亜の天地は逆転した。
足がもつれ、転んだ。

最悪の上の表現は、何だったろう？

とりあえず、超でもつけておこう。

もうヤケだ。

未亜は、超最悪の中、痛む体を起こそうとして、動きを止めた。

ぽんっ

誰かに、肩を掴まれた。

「――へっ？」

視線を肩に向ける。

小さい手。

小さい手だった。

白くて、人形のような手。

ただ、じっと、肩を掴むだけの手。

震えているのは、手じゃない。

未亜自身だ。

悲鳴すらあげられない。

悲鳴が声にならない。

口から出るのは、空気だけ。

「オネエチャン」

そう、言われた気がした。

体に力が入らない。

もう、終わりだ。

「信楽！」

未亜の耳に、図太い男の声が聞こえた。

何か、巨大なモノが自分の背後のモノに体当たりしたのを感じた
途端、未亜の体は凄まじい力で宙を舞った。

「！！」

気が付くと、大男が自分を肩で担ぎ上げていた。

「南雲先生!？」

その顔には見覚えがあった。

というか、自分の担任の顔だ。見覚えがない方が、どうかしている。

「退くぞ!」

「にゃっ!？」

「あれは俺の手に余る!」

10分後

未亜と南雲は、駅構内のファミレスにいた。

明るくて、人気の多い所のほうが、未亜も安心するだろうと南雲が判断したからだ。

「ま、水でも飲んで落ち着け」

「……ドリンクバーでもいいよ?」

「自腹ならな」

「えーっ!？ケチ!」

「教師の薄給をなめるなっていうか、命の恩人にそれはないだろう?」

「……ありがと。センス。じゃ、おごってあげる」

「そうか。すまないな」

「学校新聞に書くけど」

「俺が払う。で?何があった?」

「……あの、原田先生は?」

「……忘れる。お前には関係のないことだ」

「――」

その一言が、全てを物語っていた。

しばらくの沈黙の後、未亜は言った。

「あのね?」

女医から聞いたこと。

美桜は子供がいないこと。
いないはずの子供が尚武にすること。
そして、さっきの手——。

「そう、か」

南雲は未亜の太腿より太い腕を組みながら考え込んだ。
教え子の見舞いにむかう途中だったとはいえ、南雲は教え子の一人を救うことが出来たことに満足していた。

満足行かないのは、教え子を苦しめている存在が、自分の力ではどうしようもない存在だということだ。

「とりあえず、信楽、今晚は水瀬の所に泊まれ。あそこなら大丈夫だ」

「え？で、でも」

「お前ん家、一人暮らしに近いだろう？不用心に過ぎる」

「で、でも……」

「——お母さん、まだ戻ってこないのか？」

「う、うん……仕事、忙しいって」

「最後に会ったのは？」

「去年の5月……こっちで仕事があった時」

「それからずっとか！？」

「し、しょうがないよ。忙しいんだから」

「だからって、子供を放ったらかしってのは、親として問題だろう？育てる気があるのか？」

「お金は、もらっているから、大丈夫だよ。いざって時は、おばあちゃんがいろいろ——」

「金の問題じゃないだろうが」

きっぱりと言い切られつつ、未亜は力無く首を横に振った。

「仕事がママの全部だもん」

「それでいいのか？」

「……うん」

「俺はよくない」

南雲は、憮然とした態度で、そう言った。

「俺は全然、よくない」

「え？」

「ここにいても、教え子がウチへ帰っても独りぼっちで、寂しいのを寂しくないなんてウソをつく。二つもよくないことがすぐに出た。だから、よくない」

「先生……」

「水瀬の所に泊まれ。あのお祭りコンビがなんとかしてくれるだろう。俺の方から連絡しておく。いいな？」

「うん」

未亜はようやく、笑顔を見せた。

「ありがとうね？ センセ」

「ああ……」

微笑み返すフリをして、南雲はとっさに視線を通路へとむけた。薄ぼんやりとした靄。

それが、少女のような形で、南雲達を見つめていた。

●翌日 葉月警察署

「おーい！ 理沙ちゃん！ お客だぜ！？」

「お客？」

カップラーメンをすすりつつ、ドアに視線を向けた理沙は、その「お客」の顔をみた途端、腰のホルスターから拳銃を抜いた。銃声は6発。

全てが「お客」めがけて、ためらいもなく発射された。

「お、おい！ 村田警部補！」

とっさに床に伏せて難を逃れた岩田が理沙を怒鳴りつけた。

「何をする！ 正気か貴様！」

「まともななら、必ずこうするもんです」

理沙は空葉莢を拳銃から取りだしつつ、言った。

「こいつに殺意を持たない奴は、こいつの存在を知らない奴だけです」

「お、お姉さん……」

水瀬は、穴だらけになった包みを涙ながらに持って立ちつくしていた。

「ひ、ヒドイ……」

「君のおかげでこっちがどんな迷惑してるか、わかってるの!？」

「じ、事件解決手伝ってあげたのに……」

「私の減棒にまで手を貸してくれたわよね」

新たに弾を込める理沙。

「お姉さんに喜んでもらおうって、お菓子までもってきたのに……」

「ち、ちよっと理沙、ヒドすぎるよ」

同僚の婦人警官から抗議が出る。

「こんな小さい子相手に、そこまでつつけんどんにならなくなったって」

「あーいいのいいの。こいつと関わると、人間絶対、こうなるって」

「そういうもんじゃないでしょ!？あーあ。泣かない泣かない!何?お菓子と、封筒?」

「グスッ……お姉さんが協力してくれたら、今の減棒処分を解除するって、警察上層部が認めてくれたから……ゴメンね?そんなに迷惑なら他、あたるから」

ペコンと頭をさげた頭を戻した時には、水瀬は理沙に抱きしめられていた。

「よく来たわねえ!会えなくてさみしかったわよお!?!元気してた!?!」

頬ずりで出迎える理沙の変貌ぶりを、同僚達はあきれ顔を通り越

し、白い目で見つめるだけだった。

「さ！行きましょ！？何？誰を迷宮入り事件の犠牲者にするの！？」

●翌日 喫茶 南風

理沙から呼び出された水瀬は、ルシフェルと博正を連れて喫茶店に入った。

「わかったの？」

理沙の座るテーブルには、相変わらず食べ終わった皿が山積みになっていた。

「10年以上前の件だから苦労したわよ？」

理沙はフォークをくわえながら、水瀬に分厚い封筒と一緒に伝票を手渡した。

「かいつまんで説明してあげようか？」

「お願い」

伝票だけ戻しつつ、水瀬は説明を促す。

「あの時の火事は、焼失18棟、死者48名、行方不明3名。火事による犠牲者の数では90年代で一番の大惨事になったのよ」

伝票をつきつける理沙。

「3名が……行方不明？」

ため息混じりに伝票を受け取った水瀬が、不思議そうに訊ねた。

「見つからなかったの？」

「遺体がね。家族3人分。当時の判断では、まあ、死体が残らないくらいに焼けちゃったんじゃないかって」

「家族……」

「そう。都筑浩一つづきこういち当時31歳とその妻由美子ゆみこ28歳、その子供の智代ちよ当時5歳。あ、お姉さん、ステーキ、レアで」

「智代？」

よく食えるなと思いつつも、「智代」の名に心当たりのある三人は、思わず顔を見合わせてしまった。

「ええ。翌年には小学校へ入学するはずだったんだけどね」

「ふうん」

「それで、その家族が住んでいた所って、具体的には今のどの辺なの？」

「当時の地図は——これね。道路は変わっていないから、比べてみて」

「えっと——？」

最新の地図と古い地図を見比べてみる。

古い地図には、「都筑」と書かれた土地があり、新しい地図では、そこが半分になった上、「慰霊碑」と書かれていた。

「つまり」

博雅は驚いた顔で言った。

「その家族、慰霊碑のあった所に住んでいたのか？」

「そういうことね」ルシフェルも呆れたように言った。

「犠牲になったのかどうかわかんない家の跡に慰霊碑なんて、縁起でもない」

「お姉さん。この家がどういうつくりだったとかって、わかんない？」

「家？」

「そう。知らない内に建て増しされていたとか」

●1週間後 大火災慰霊碑

「ったく——」

現場で指揮を執る理沙は、呆れていた。

あの子に絡むと、どうして事態がこうも大きくなるのかしら。

理沙は単に、施行を行った建売業者に施工図を見せてくれと頼んただけだった。

しかし、担当者が都筑の名を耳にした途端、顔色を変えたので、軽く尋問してやった結果、違法建築物であったことが判明したのだ。事前申請が必要な地下室が、無許可で作られていた。

しかも、この都筑が曲者だった。

都筑は、土地転がしを生業とする企業暴力団の一員だった。

この暴力団は、非合法的な土地買い上げと転売で暴利を得たはずだが、肝心の金のありかが不明のまま、証拠不十分で警察が立件を断念した組織だ。

地下2メートルほど。

違法建築であるため、それほど深くは掘られていない。

重機で10分も掘らないうちに、入り口が見つかった。

崩れたコンクリートの向こう、地下室と言われなければ、理沙にはなんだかわからないものが存在していた。

「なんでこんな所に気づかなかったの？」

「当時この辺みんな焼け野原。みんな、さっさと片づけたかったというのが本音だよ」

「だからって」

「バブルの頃だぜ？ 厄介事はみんな知らん顔して、金づるにしたかったところさ」

「それでもいい加減じゃない」

「いい加減が丁度いい加減になることだってあるのさ。わかんดารろ？」

土建屋のオヤジが入り口のドアらしい所にツルハシを向けながら言った。

「さ。壊すぜ」

ツルハシとハンマーが、10年間、地下室を守り抜いてきたドアを破壊した。

「ふえーっ。やっと開いた」

土建屋のオヤジが懐中電灯を理沙に手渡しながら言った。

「土建屋の仕事はここまでだ。あとは、あんた達の仕事だろう？」

「そうね。アリガト」

理沙は、部下3名と共に地下室へ入った。

懐中電灯に照らし出されるのは、あの火事と10年の歲月により変色した壁紙と、床に散らばる得体の知れない家具の残骸。

そして、部屋の奥。

「都筑一家、か」

そこには、折り重なるように倒れた死体がいた。

服はボロボロだったが、それでも、ネグリジェをまとった骨が女、都筑由美子、その上を護るかのように倒れているパジャマ姿が都筑浩一だと見当をつけることくらいは出来た。

「鑑識を」

部下の一人に命じつつ、理沙は心の中で手を合わせた。

「こいつら、何で、こんな所へ？」

「火事で逃げ遅れて、とっさに地下室に入り込んだ。ところが」

理沙は壁や天井をざっと見た後に言った。

「酸欠になって死んだのね。きっと」

「酸欠？」

「違法建築でしょ？通気口をつけなかったのが運の尽きね。通気口をふさがれて、熱と煙と酸欠で……」

「で、ダンナは最後まで妻を護り……」

「妻は、こど……」

理沙は懐中電灯を死体に向けた。

ネグリジエをまとった骨は、確かに、何かを抱きかかえていた。それは、ふるぼけた毛布。

だが、毛布は空っぽになっていた。

「……」

ぞっとしながら、理沙は毛布だけを見つめていた。

3時間後

死体が運び出された後、地下室の床に隠された隠し金庫から、多額の現金が発見された。

「10年前のヤマはこれで解決」

理沙はうかない顔で地下室に出入りする関係者を眺めていた。

「よかったじゃないですか。もしかしたら、女の子も、誰かが助けているかもしれませんし」

「で、なんで行方不明のまま、10年過ぎているのよ」

「それは、何か、公に出来ない事情があって」

「小学校だって、戸籍なければ入れようがないでしょ？」

「……」

理沙にはわかっていた。

水瀬達は、あの智代を探している。

そして、智代の生死は、未だに確認されていない。

「村田警部補」

地下室から自分を呼ぶ声がした。

「ちょっと来て下さい」

「どうしたの？」

照明が持ち込まれ、さっきとはうってかわった地下室では、鑑識が数人、壁に耳を当てていた。

「壁の向こうから、何か奇妙な音が」

「音？」

こんな薄汚い壁紙に顔を当てるのは、正直、女としてイヤだったが、やむを得ない。

理沙も耳を押し当てる。

ゴトゴトゴト

確かに、何かが動いている音がする。

「土建屋、まだ帰っていないわね？もう一仕事してもらって」

「いいのか！？知らねえぜ！？」

死体が出た部屋だ。

屈強な男でもいい気はしない。

「こんなか弱い美人が頑張ってるんだから、あんたらも気張るなさい！」

「ケッ。自分で言ってるや、世話ねえぜ」

毒づきながら、土建屋のオヤジは部下と共にツルハシを振り下ろした。

ドコンッ！

鈍い音と共に、壁が崩れ落ちた。

「へっ？」

壁の向こう、そこは立派な木造の部屋。

部屋の中には、博物館でしか見たことのないような豪華な刀や装

飾品が並んでいた。

「都筑の隠し部屋？」

「こいつはスゲー！」土建屋のオヤジが驚いて刀に手を伸ばす。

「見ろよ姉ちゃん！こいつは値打ちモンだぜ？拾いモンで俺にくれよ！」

「バカ言わないで」

その途端、凄まじいベルの音が鳴り響き、ドカドカと誰かが走ってくる音がしたかと思うと、リサ達の視界に、数人の男達が飛び込んできた。

「誰だっ!？」

理沙が驚いたのは、その男達が手に手に拳銃を握っていることだ。とっさに理沙達も拳銃を抜く。

「……」

「……」

しばしの沈黙。

理沙に言わせれば、「とてつもなくイヤや沈黙」が過ぎた後、向こうから銃を降ろしてきた。

理沙とその部下達は、相手の顔を知っていた。どうしよう。

その言い訳が思いつかない。

やがて、向こうから声をかけてきた。

「何をしている」

「あ、あの――」理沙が返答に窮していた。

「いつから、部下を使って泥棒を始めたんだ？村田ア！」

理沙の前で怒り心頭の顔で立っているのは、岩田警部だった。

10分後

理沙の事情説明を苦虫を噛み潰したような顔で聞いていた岩田が、ようやく重い口を開いた。

「――つまり、隠し部屋を探していたということか」

「そういうことです」

「尚武の地下室と、都筑の地下室がそんな間近に作られていたとはな」

「偶然、ですか？」

「意図的だったと、説明できるのか？」

「いえ」

「なら、偶然だ」

「あの」

「なんだ？」

「警部は、何故、ここに？」

「桜井美奈子、知っているな？」

「あの、水瀬クンから保護依頼のあった？」

「そうだ。彼女が、病院から失踪した」

「!？」

「そして、昨晚、尚武で見たという連絡が入ったんだ。これでわかったか？」

第八話 「闇」

●2日後 茶 南風

美奈子の失踪は、関係者を青くさせた。

死鏡を破壊、依代になっていた美奈子は鏡より解放されたと判断していた水瀬達は特に、だ。

「鏡は、破壊されていなかったの？」

ルシフェルは納得できないという顔で水瀬に言った。

「あの時、鏡は間違いなく破壊されたはずだよ？私も確認した」

「僕もそうだよ。でも」

水瀬は黙った。

「……何？」

「あれが、本物だという保証は出来ない」

「じゃ、ニセモノがあんな騒ぎを？まさか……」

「多分、あれは、鏡の分身だったんだよ。破壊されて力を失った。だけど、それは本体には何の被害ももたらせていない」

「分身？」

「手応えがヘンだったっていったよね？あれは本体を破壊していったからなんだ。いくら尻尾を切っても、トカゲ本体が死ぬことはないのと一緒に。これで繋がったよ」

水瀬自身は、妙に納得した顔でお茶をすすする。

「桜井さんは、今度は本体に乗っ取られた。分身が乗っ取った体だもん。本体ならずと楽だよ」

「あのね？」ルシフェルは水瀬に訊ねた。

「だとしたら、美奈子ちゃんを乗っ取って何をするつもりなの？」

「わかんない。可能性としては」

水瀬は茶碗をテーブルに置いた。

「本体がそろそろ保たなくなってきたってことかな——あっ。来た」
店に入ってきたのは、理沙だった。

「お待たせ」

「お姉さん、どうしたの？随分やつれているけど」

目の下の隅といい、「私、疲れ果てています」という顔の理沙の顔を見つめつつ、水瀬は心配そうに言った。

「何日も寝ていないって顔だよ？」

「その通りよ」

理沙はなげやりに言った。

「10年前の事件にまでかかわるハメになって。おかげでここんところ、ロクに寝ていないわ」

理沙はハンドバックから封筒を一枚取りだして水瀬に渡した。

「はい。幼稚園に保存されていたものよ。探す間中、園児の世話させられて大変だったんだから」

「園児に発砲しなかった？」

「お尻触ってきたガキに威嚇発砲した程度よ」

封筒の中身は写真。

幼稚園の集合写真だ。

「どれ？」

「この子」

理沙が指さしたのは、一人の女の子。

「なるほど、ねえ」

水瀬は感心したように写真を見つめると、持っていた一枚の写真と共にルシフェルに手渡した。

尚武で智代をあやすルシフェルを、博雅がケイタイのカメラで撮った写真。

「水瀬君、これって……」

「ルシフェ。そういうこと」

「？」

テーブルに置かれた写真。それは10年間の歳月を無視した子供

の写真。

同じ子供が、同じ園児服を着て無邪気に笑っていた。

「他人のそら似っていうにしては、話がうますぎるわ」

「お姉さん。現場から指紋、とれた？」

「ダメ。10年だもん。でも、幼稚園にね？この子の書いた絵と一緒に、手形が残っていたわ」

「手形？」

「子供の成長の記念につて、よくやることよ。ま、親心ってやつね」

「お姉さんは全く縁がないことだね」

「いいつつ、水瀬がポケットから取り出したのは、ビニール袋に入ったサンマドロップの缶。」

「指紋、調べて」

「これは？」

「今、尚武にいる子の指紋が採れるはずだから」

「……わかったわ。で」

理沙は剣呑な目で水瀬を見つめつつ、言った。

「私が親心と縁がないつて、どういふことか、説明してくれる？」

翌日、学校にかかってきたのは理沙からの電話。

驚きを隠せない理沙に比べ、水瀬は平気な顔をしていた。

10年

10年の間、変わることないよう、成長を止めたとしてもいいのか？

「それで、お姉さん。須藤智代の在籍は確認できた？」

「だめ。葉月市周辺の幼稚園や保育園まで調べたけど、都筑智代でもね。何しろ」

「？」

「厳密には、須藤美桜は結婚していないわ」

「え？」

「婚約者が一年戦争で死んでいるのよ。刀の修理師でね。本当は尚武の跡取りになるはずだったのよ。あの戦争で、前線で刀剣の修理に関わっていて……」

「そう、なんだ」

「第2次洞峠攻防戦で未帰還。死亡認定されている」

「……」

「おかげで、美桜さん、精神がおかしくなってね。今は戻ったらしいけどさ。数ヶ月前まで、婚約者と自分はずでに結婚していて、後は子供を待っただけだって思っていたそうよ。病院で聞いたわ」

「じゃ、美桜さんは……」

「病院で受けた不妊治療は、正しくは精神治療。確かに効果があったらしいわよ？ 美桜さん、精神状態がそうだったから、ホルモンバランスとか全部崩してしまっただけね。生理も止まっていたのよ。で、不妊治療にかこつけて、治療が施されたのね」

「当然、子供はいない。と」

「その「いないはず」の子供の指紋だけが残っている」

「うん……」

「10年前に死んだ都筑智代と、何者なのかわからない須藤智代の指紋が一致したなんて、何の悪い冗談よ、これ」

「あれ？」

放課後、尚武に立ち寄った水瀬とルシフェルは、ドアにかけられた案内板を見て、首をかしげた。

『本日は終了しました。またのご来店をお待ちしております』
もう夕方だ。

ということは、今日は休みか？

水瀬は主の自宅の方に回った。

チャイムを押すが、反応はない。

「……」

●明光学園前派出所

「都筑、ですか？」

巡查長は、その名を聞いた途端、苦い顔をした。

「あいつの件は、私がここに配属されて最初の事件でした。いや、ヤクザというより、銀行だか内勤の連中みたいなイヤな感じのする奴でした」

「キレ者ってところ？」

巡查長の出してくれたお茶を飲みながら、理沙は話を聞いていた。

「そうです。マトモな世界でやってれば、それなりに成功したでしょうね。とにかく尻尾をつかませない。お仲間の連中ですら、最後まで、アイツがどこに金を隠していたか知らなかったと聞いた時は、笑いましたがね」

「身内ですら信じていなかったの？」

「アイツは、血が凍っていたんですよ」

巡查長は、無然とした顔で言った。

「人間、どうすればああも冷たくなれるかって位、ね」

「会ったことが？」

「そりゃ何度も。敵対するヤクザがね？アイツの家に襲撃かけた

こともあるんですよ。その度にこちらが出勤するわけで。そうすると、事情聴取ですら、法律がどうのこうの、権利がどうのこうのって追い返しにかかる。挙げ句が、民事不介入だの、マスコミだの国会議員だのに知り合いはヤマほどいるって脅しにかかる。やってられませんでしたよ。言っちゃわるいですけどね？あの火事で行方不明って聞いた時は、死んだなんて考えもしませんでしたよ。ああ。こりゃ、逃げたなって」

「死んだって信じられなかった？」

「ええ！だってそうでしょ？あいつは人間の皮被った蛇だ。冷血動物——いや、機械で出来た悪魔だ。あいつのしでかした企業犯罪で、何人が死んだかはご存じでしょう？やれ自殺だ何だで。一家心中に追い込まれた奴の現場にも行きましたよ。そんな奴が、どうして人間らしく“死ぬ”なんてマネが出来るはずがないとね」

「因縁——かしらねえ」

「おや？元官僚が、因縁なんて信じているんですか？」

「信じているから、出世街道から追い出されたのよ」

自嘲気味に笑う理沙の茶碗に茶をつぎ足しながら、巡査長は言った。

「ま、あのヤマで岩田警部やあなたのとった判断が正しかったことは、現場の連中なら誰でも理解してますよ。でね？警部補。因縁といえbaumう一つ、あいつが住んでいた所、昔、何だったかご存じですか？」

「住宅街？」

「違いますよ」巡査長は笑って否定した。

「もっと前です」

「？」

「幕末まで、あそこは刑場だったんですよ。しかも、死体捨て場」
「鈴ヶ森は知っているけど」

「それは江戸市内です。葉月は市外、この一帯では唯一の刑場ですよ。人食い穴っていう、大きな、多分鍾乳洞だと思いますけどね

？そんな穴があって、死体はそこに捨てられた。便利だから選ばれたんじゃないですか？大正の頃には埋まっていたそうですけど。しかもね？警部補、あいつの家は、その真上に建っていたんです。知った時はふさわしいところに住んでやがるって笑いもしましたよ」「へえ？」

「この近隣の処刑は全部引き受けていたそうだね。年間刑死者は千人近く。江戸開府から260年近くとすれば、26万人ですかね？あそこで死んだのは。記録だともっと古く、鎌倉くらいですから、あいつの家、人食い穴はそれだけの人を喰ってきたんですよ」「因縁だけで幽霊でるなら、品川のあたりは今頃大変なことになってるわよ」

「鉄道敷設にあわせて、近衛が総掛かりでも除霊に3年だそうですよ。ま、考えてみれば、その後の災害、事件、事故、いろいろあったけど、その犠牲は、どこか因縁なんでしょうねえ」

「でも、葉月は近衛の軍都でもあるし」

「そこが違うんですよ」巡査長はお茶を飲みながら言った。

「元は演習地です。人を近づけさせないために」
「？」

「ここは陸路と海路の接点。交通の要衝でもありましたね？古くは平安時代の動乱から始まって、この辺は幾度となく戦場になっています。秀吉の関東攻めの際、反逆者を皆殺しにしたのもここ。幕末には江戸攻略を目指す新政府軍と幕府軍が魔法騎士まで動員して戦ったのもここ。昔は言ったそうです。葉月は土も海もまんべんなく人の血で穢れているって」

「あのね？」

理沙は訊ねた。

「よく言うじゃない。葉月湾は元は存在しなかったって。あれって本当なの？」

「そうですね？あれは魔法騎士の攻撃によるもの。――ま、魔法が暴発というか、暴走したというのが正しいらしいんですが。と

にかく、敵味方巻き込みでの大爆発で発生したのがあのクレーター、そして葉月湾です。一説には両軍合わせて10万が一瞬で消滅。一瞬ですよ？」

「で、その犠牲を隠すために？」

「こんな曰くのある所だから、この辺で時々出る白い石はほとんど骨だっていいです。なにより、葉月湾は原因が魔法でしょう？明治のしばらくまで、この辺一帯、魔力的には異常地帯だったそうでいわば妖魔の巣窟になったんですよ」

「危険だった、ということなのね？」

「そうです。原因作った近衛は、今でいえば、倉木と同じですよ。ご存じでしょ？倉木周辺を近衛が危険地帯だからって接収したって。ここもそう。一帯を基地だの演習地だのにして、世間から隔離すると同時に港を作りもした。ま、その時の御用商人、加納なんですよどね」

「世の中、うまく出来てるものね」

「うまく立ち回るヤツはどこにでもいるもんです。加納は処刑場だった所にも目をつけて都市まで作った。これが今の葉月市の発足した経緯です。で、軍都とするのにあわせて、近衛に虱潰しにヤバい所を潰させた。何しろ、少し掘ればあちこちで骨の山が出来るところです。かなりてこずったらしいですけどね」

「へえ」

「所がね？近衛もいい加減なモンで、この葉月のどこかの古墳だか室を利用して、随分厄介な存在——それが何かはわかりせんよ？——を、封印したところが、近衛自身、それがどこだったか、今ではわからないというんです」

「じゃ、その地下には何かがいる。ということね？」

「いた。というべきかもしれません」

「調査は残ったお茶を飲み干した。」

●須藤宅

夕暮れの中、水瀬はチャイムを押した。
これで5度目。

数名の弟子が住み込んでいるため、必ず誰かがいるはずだ。
なのに、何故、誰も出てこない？

「どうするの？」

ルシフェルは水瀬に訊ねた。

理沙に連絡して、警察として中を確認してもらおうべき。

というのが、彼女の判断だった。

しかし、

「いくよ」

水瀬は塀を飛び越えて庭に入り込んでいった。

「え？み、水瀬君！？」

ルシフェルは、水瀬の後を追った。

●須藤邸 庭

よく手入れされた典型的な日本庭園に面したサッシはすべてカギ
がかかっている。

「やっぱり、外出してるんじゃない？」

「ルシフェ、郵便受け、見た？」

「ううん？」

「新聞がたまっていた」

「それが？」

「外出しているなら、何故たまっているの？連日店を閉めるなら、
主の性格からして、張り紙くらいはしているはずだよ？」

「……」

「おかしい。でしょ？」

「でもね？」

「何？」

「店を閉めて、家の戸締まりもしている。つまり、誰もこの家に

はいないと判断するのが普通でしょう？新聞だって、取り忘れているだけかもしれないし」

「うん」

水瀬は、気のない返事をしつつ、裏に向かって歩き出した。ポケットからは何故かゴム手袋を取りだしつつ。

●須藤邸 勝手口

勝手口も典型的な和風。

植木鉢に植えられた朝顔が蔓を伸ばしていた。

「あった」

水瀬は伏せられた植木鉢の中からカギを取り出した。

「やっぱり、こういうのって、どこも同じなのかなあ」

「水瀬君。それ、いけないことだよ？」

「ウチだってそうでしょ？」

「カギをここに置くことじゃなくって」

「？」

「カギで何するつもり？」

「ドアをあける」

他に何するの？という顔の水瀬がルシフェルを見た。

「……もう、何も言わない」

「じゃ、土足であるのも失礼だから、これつけて」
手渡してきたのは靴を覆うビニールカバー。

「……覆面は？」

●須藤邸 屋内

室内は静まりかえっていた。

気になるのは、廊下の照明がつきっぱなしなこと。

そして――

「ダメ。眠らされている」

廊下に倒れていた若い男の脈をとっていた水瀬が言った。

「すごく強い魔法だね。解呪には時間がかかる」

「この人だけじゃないよ」

他の部屋を回ってきたルシフェルが言った。

「4人位、同じように倒れている。それと、尚武のご主人と美桜さんもいた」

「智代ちゃんは？」

「ダメ。どこにもいない。ただ」

「ただ？」

「美桜さんの部屋、つまり、智代ちゃんの部屋に、これがあつた」

ルシフェルが取りだしたものの。

それはパジャマ。

「？」

「美奈子ちゃんのよ」

●大火災慰霊碑 都筑邸跡地

「恨みは晴れていない――か」

死体発見の報道を知ったものが置いていったらしい花束は、何者かによって踏み散らされている。

『金の亡者！』

『地獄に堕ちろ！』

慰霊塔にはスプレーで呪いの言葉が書かれている。

理沙も、昨晚、警察の目を盗んで地下室に潜り込んだ者がいたらしいと報告を受けている。

皆、都筑に恨みがあるか、都筑の財産が狙いだろう。

死者になった都筑と、死者にここまでする生者と、どちらが業が深いのか、理沙は少し考えた後、立ち入り禁止のテープをくぐった。

——どっちもどっちだ。

それが、理沙の出した答えだった。

●地下室

昨日とは、何かが違う。

理沙の警察官としてのカンは、理沙に警告を発していた。

「……」

地下室の真ん中に行っていた理沙は、無意識に拳銃を抜き、そつと後ずさる。

床

床がヘンだ。

そつと足に力を入れる。

床に走った亀裂が大きくなった。

床が崩れかけている。

——何だ？

ミシ

ミシミシミシ

氷が割れるような音がして、床が崩れ始めた。
自分の体重が重いせいじゃない。

そんなことはあろうはずかない。

少し、ほんの、たかが、わずか5キロほど太っただけだ。

5キロで床が抜けてたまるか。

理沙は出口まで駆け戻り、崩れゆく床を見た。

床は音を立てて崩れ落ちていった。

ドシャン

その音を聞くには10秒以上を必要とした。

つまり、かなり深い。

穴をよく観察すると、白いモノが無数に張り付いていた。

最初、理沙は石だと思った。

しかし、それが違うことは、すぐにわかった。

理沙は、それに戦慄しつつ、巡査長の言葉を思い出していた。

——葉月は市外、この一帯では唯一の刑場ですよ。

——人食い穴っていう、大きな、多分鍾乳洞だと思いますけどね？そんな穴があって、死体はそこに捨てられた。

——大正の頃には埋まっていたそうですけど。

これが、そうなんだろう。

——しかもね？警部補、あいつの家は、その真上に建っていたんです。知った時はふさわしいところに住んでやがるって笑いもしましたよ。

私だって笑ってやる！

ここを無事に逃げ出せたら、私だって笑ってやる！

理沙は穴に張り付くモノに吐き気すら感じながら、そう思った。

穴に張り付き、はい上がろうとしているモノ

それは、ヒト、だった。

いや、ヒト、だった、モノ、だ。

「——えっ？」

それが今、理沙の足首を掴んだ。

第十話 「冗談みたいな悪夢」

自分が悲鳴をあげたかどうか、それすら理沙は覚えていなかった。ただ、覚えているのは、自分の足を掴んだのが白い手だということ。

穴から虚ろな目で自分を見つめてきたのは、丁髷を結った老人だということ。

そして、その老人が、生きていないこと。

それだけだ。

カチッ

カチッ

カチッ

理沙が自分の置かれている状況を把握できたのは、この音のせい。

拳銃の引き金の音。

その音が発する意味まで理解が及んだとき、理沙は、自分がさらに悪い状況に追い込まれていることに気づいた。

すでに、弾丸は、ない。

足を掴まれた理沙は、パニック状態のまま、老人目がけて、老人が、腕を吹き飛ばされ、頭を碎かれ、奈落の底へ堕ちていくまで、撃ち続けた。

理沙は護身の術を失った。

穴の淵に何人もの亡者が取りついた。

こちらに向かってくるのは時間の問題だ。

理沙には、それをどうすることも出来ない。

理沙には、自分を護る術すら、存在しない。

出来ることは二つ。

ここで殺されるか、それとも――。

理沙はとっさに逃げ出そうとして、動きを封じられた。

ハンドバックを、誰かが掴んでいる。

そして、背後からは、この世のモノとは思えないようなうめき声が聞こえてくる。

「じ、冗談じゃないわよお！」

泣きそうになりながら、理沙は力任せにハンドバックを引っ張ったせいで、ハンドバックが引きちぎられ、中に入っていた化粧品やその他諸々が床を転がっていく。

その中に、理沙は光明を見いだした。

それは、小さく畳まれた封筒。

中身は――。

理沙は、とっさにそれを掴むと、出口へ向けて駆けだした。

幸い、亡者の動きは鈍い。

出口まで出た理沙は、一挙動で拳銃の空薬莢を抜き取り、破り捨てた封筒の中から取りだした、新たな弾丸を装填した。

——今度、あの子に会ったら、キスくらいしてあげよう。

理沙はそう思った。

法儀式済み水銀弾。

加納重工が近衛軍向けのみ製造している対妖魔戦闘用特殊弾。純銀製マケドニウム加工弾殻で覆われた法儀式済み水銀弾頭を採用した超高級品。

一発で妖魔を撃破することができる、騎士以外の人間が使える最も有効な「兵器」。

警視庁所属の理沙がどうしたって手に入る代物ではない。

（もしもの時、使って）

そういつて、38口径弾10発を理沙に託したのは。水瀬だった。

（危険な仕事ばかりだから……ごめんね）

使うはずはない。

そう思っていたのは、私の甘さだ。

水瀬くんは、万一に備えてくれていた。

だから、今度、会えたら……

弾を込め終わった理沙は決めた。

「とりあえず、一発殴るか」

うん。それがいい。

私はシヨタコンじゃない。

私のストライクは――

理沙は、白いモビルスーツ――ではなく、少なくとも、ゴツサではいい勝負の上司の顔を思い浮かべながら、片手で携帯電話をかけ続けの状態にして、地面に置いた。

異常事態が発生していることは、これで署に知れる。

しかも、ここは住宅街だ。

ここで発砲すれば、いやでも通報が、そして。仲間が――

ちらりと後ろを見る。

パトカーのエンジンはかけっぱなしのままだ。

万一の時はすぐ逃げられる。

理沙の準備が整うのを待っていたように、出口からは、緩慢な動きで亡者達はい出てくる。

先頭の亡者は白い着物姿。

首がないのは、斬首された亡者なんだろうか？

その後ろにも、何人もの亡者がいる。

まともな死に方をしていないのは、その姿でわかる。

唯一、幸いなのは、地下室からの通路が狭いため、一体ずつしか出てこない。ただ、それだけだ。

「登場する作品、間違ってるわよ？」

理沙は舌なめずりしながら言った。

「この作品は、手に汗握る美貌の女警察官のサクセスストーリーなのよ」

理沙は、引き金を引いた。

3発

4発

5発

まるでゲームセンターの感覚だ。

1発ごとに、確実に亡者は倒れ、そして動かなくなる。

だが、亡者を5体も倒した勇者であるべき理沙は、発砲の度、恐怖心を強くしていた。

あと、4発

あと、3発

あと――――

そう。

撃てば撃つだけ、護身の術が減るのだ。

つまり、理沙の置かれた状況は、よくなるどころか、逆に悪化するだけ。

「やっぱり殴る！」

理沙は叫んだ。

水瀬クンは、遠回しに私を殺すつもりだったんだ！

でなければ、弾丸10発なんて少なすぎる！

護るつもりなら機関銃もってこい！弾丸100万発くらいつけて！

「水瀬クンのバカあ！」

カチンッ！

そのセリフに気を悪くしたのか、銃がいうことを聞かなくなった。

「——え？」

弾丸が水瀬のモノだったのがまずかったのか、引き金が引けない。

「くっ——このお！」

渾身の力を込めても、引き金が作動しない。

「こんな時に！」

理沙は、銃を亡者目がけて渾身の力で投げつけた。

顔面を直撃された、礫にされた女だろう亡者が仰向けになって倒れ、後続の亡者達も将棋倒しになって倒れていく。

「冗談じゃないわよ！」

理沙は、パトカーの運転席に飛び乗り、ギアをバックに入れ、動きを止めた。

周囲を、街の景色を、見たからだ。

逢魔が時

昔の人は、そう呼んだ刻

実際、私は魔に出会っている。

だけど――

家々に灯された灯りは、そこに人が、理沙が護らねばならない人々がいるということだ。

理沙は悟った。

水瀬クンなんか関係ない。

最初から、逃げ場はなかったんだ、と。

ここで食い止めなければ、どんな事態になるか。

理沙は考えたくすらなかった。

亡者達は出口から続々と出てきている。
ここで、止めなければならぬ。

重機が入りやすいように作られた坂を登り切るのも時間の問題だ。
何としても、ここで止めなくては！

「やるしかないっての！？」

理沙は、ギアをドライブにたたき込むと、アクセルを力任せに踏み込んだ。

「——くっ！」

坂に飛び込む直前、パトカーから飛び出す。
鈍い音に爆発音が続く。

「痛ったあゝっ……」

こんなこと、熱血刑事ドラマの中だけだと思っていた。
まさか、こんなことまでやるハメになるなんて……。

「もう、最低……」

黒い帳に包まれようとする空には、星がまたたいていた。
「……星」

理沙は、地面に大の字に転がりながらぼやいた。

星

目指したのは、星

一度は手にした星

だけど、今は手を伸ばしても届かない、星——

今の私は――

「――私、どこまで転がり落ちるんだろう」

キャリアがまたたく星なら、今の私は、星くずか？燃え尽きようとする流星か？

全く、今年に入ってから、始末書だけで何枚書いたんだろう？
何度、上司に怒鳴られたろう？

そして……

泣きたくなる位、痛む体にむち打って起きあがった理沙の目の前で、パトカーが燃えていた。

地下室の出入り口にめり込んだ時に、燃料が漏れ出たんだろう。
新車のパトカー一台、ダメにした。

拳銃もだ。

警察手帳は、確かハンドバックの中だ。

また、始末書、何枚書くんだろう。

減棒は、確定だろう。

また、カップラーメンが主食の日々に逆戻りだ。

「クスン……私、いつになったら、白いご飯が食べられるの？」

あまりといえはあまりのことに、目の前がぼやけてくる。

遠くからサイレンの音が聞こえてくるのを聞きながら、理沙はもう一度、大の字に転がって星を見つめた。

坂を転がる石のようなわが身の痛みを感じつつ――。

発砲。パトカー炎上。

およそ閑静な住宅街で起きていいことではない。

だから、住民達は110番へ通報し、野次馬となった。

「全く、どういう騒ぎだ？」

理沙にとって恐怖の上司、岩田警部が、理沙からの事情説明を本部に報告し終わったらしい。

「これは一体、何の冗談だ？」

黒こげになったパトカーを一瞥した岩田の質問に理沙は言った。

「ホラー映画に出演したんですよ」

絆創膏を貼り終わった理沙は、岩田から拳銃を受け取ると、弾倉を確認した。

対人用の通常弾頭。

それが屍鬼相手に気休め程度でしかないことは分かり切っている。あの穴からはい上がる亡者を思いだし、理沙は戦慄した。

「後一步でスプラッターに趣旨替えでした」

良くできた冗談だと思った。

だが、受けた相手は表情を崩さなかった。

「俺にとっては、悪夢だよ。あのパトカー、俺が使うはずだったんだぞ？」

「私のです」

制服組による付近の封鎖が始まった。

「公には事故だ。いいな？」

「私のせいですか？」

「不審者への威嚇発砲の末、逃走した不審者を追跡しようとしたところ、ギアの操作を間違え、パトカーは大破・炎上した。筋書きとしてはこんなところだ。安心しろ。始末書は書かなくていい」

「何故です？」

「ん？」

「何故、今回はそこまで破格の扱いなんですか？」

「……よく考えてみる」

岩田は言った。

「住宅街のど真ん中に、「亡者だか屍鬼の巣窟があります」なんて公に出来るか？パニックが起きるのは目に見えている。その責任を、誰が、どう、とれるというんだ？」

「……」

「村田、お前はよくやった。少なくとも、連中を外に出さなかっただけでも、大したモンだ」

「この後は？」

「夜、近衛が内密に始末する。それまではあくまで、事故だ」

●尚武地下倉庫

カリカリカリカリ……

倉庫の壁の一部が崩れ、ベニアが貼り付けられている。

その向こうから聞こえてくる、奇妙な音。

それが、亡者達がベニアをひっかく音だと聞かされた時、博雅には、このベニアこそが、この世とあの世の境目だとすら思え、背筋が寒くなった。

不安を隠すことが出来ず、博雅が水瀬達を見た時、

ゴツンッ!!

「いったあゝっ!!」

倉庫中に響きわたるような悲鳴が上がった。

理沙が水瀬の頭を殴った音だった。

「まったく、で? どうするの?」

手をさすりさすり、理沙は水瀬に訊ねた。

「向こう側は、屍鬼封じの符が効いているから、連中が出ることはないけど」

「このベニア外して突入。区画単位で潰しながら行く」

「あっそ、単純なんだ」

「シンプルイズバスト、だよ?」

水瀬が、あれっ? という顔をしたとき、すでに遅かった。

ガンッ!!

「このエロガキが! どこ見て今のセリフ吐きやがったあ!?!」

「あ、あの、警部補、その辺で」

恐る恐る声をかけてきたのは、博雅だった。

「セクハラは万死に値する犯罪行為だって知らないの!?!」

「き、気持ちは察しますが、ここで水瀬に死なれると、大変困るわけ」

肩で息をしながら、水瀬の胸ぐらを掴む理沙をなだめすかす博雅は、とにかく、理沙の手から拳銃だけは取り上げた。

「銃尻で人を殴るのは警察官、というより、人としても問題が」

「まあ、いいわ」

理沙は呼吸を整えた後、言った。

「長生きしたかったら、言葉には気をつけなさい!」

「ううっ、ヒドイ目にあった」

装備を調えながらぼやく水瀬と

「自業自得」

同じく、装備を調えながら冷たい視線のルシフェルが叱るように言う。

「綾乃ちゃんに言いつけるから」

「な、なんで？」

「叱ってもらう」

「これで桜井さんがいれば、完璧なんだがな」

博雅のため息混じりの言葉に、二人は黙った。

「とにかく、助けなくちゃ」

「うん」

「で？どうやって？」

「まずは――」

水瀬は、足下にあったバスケットから黒い、大きな筒を取りだした。

「何ソレ？」

「対戦車用大型手榴弾。まず、これを投げ込んで」

筒を床に置くと、その横にルシフェルが四角い段ボール箱のようなモノを置く。

「超高燃焼カクテル爆弾。これで穴の中を高温で焼き払って」

最後に二人が取りだしたのは、巨大な箱に入った手榴弾の山。

「片っ端からこれを投げ込んで始末します」

「ちよつと待て」

理沙が頭痛を抑えながら水瀬とルシフェルに言った。

「ようするに、爆弾よね？そんなことしたら、中はどうなるの？」

「ぐちゃぐちゃの黒こげ」

ルシフェルも無言で頷く。

博雅は二人の横で頭を抱えている。

「あんた達、魔法騎士でしょう！？こう、魔法で何とかできないの！？」

「……」

「……」

ちらりとお互いを見た後、水瀬が言った。

「だって面倒くさいし」

うんうん。とルシフェルも肯定している。

「近所迷惑だから止めなさい！」

「警部補、それはそれで違うんでは？」

結局、「爆発音と衝撃が、穴にどんな影響を与えるかわからないため」という建前。本音は「魔法騎士らしいことをマジメにやれ！」という理由で、

水瀬達は普通に穴に侵入することになった。

「せめて閃光弾くらいはいいでしょ？」

「音が出なければね」

「うん。じゃ、ルシフェ。いくよ？」

「了解」

サングラスをかけ、突入体勢をとる二人。

「せえの」

水瀬が手榴弾を投げ込んだ。

バンッ

破裂音と共に、ベニア板の隙間から強い光が漏れてくる。

バリッ！

ベニア板が蹴り破られ、水瀬とルシフェルが突入する。

強い閃光に邪魔され、何が起きたのか、理沙にも博雅にもわからない。

「入り口は確保したよ？」

閃光が止み、視界が復活した時、穴の向こうからひょっこり顔を

出した水瀬にそう言われ、ようやく突入に成功したことを知っただけだった。

博雅は恐る恐る穴をのぞき込んだ。

深い。

上から照明で照らされているから、底を見ることは出来るが、20メートルはあるだろう。

そして

「あの下の白いのは――」

「亡者」ルシフェルが事務的なまでにきっぱりと言った。

「屍鬼のお仲間。大丈夫。始末してあるから」

「死にきれないって言葉はあるけど、本当にあるんだなあ」

「死にたくて死ぬ訳じゃないもの」

「でも、人はみんなそうだ」

「そう。でも、ここで死んだ連中のほとんどは、この世の業が強すぎるのよ」

「業？」

「うん。罪を犯し、その罪の代償として与えられた死だもの。この世への執念ともいえるかしら。普通なら、ああよく生きたって思えるのに、業が強いから、死にたくないって念が、自分は殺されるっていう恨みとなって」

「魄ってやつか」

「そう」

博雅はため息まじりにぼやいた。

「俺は、畳の上で大往生したいよ」

「腹上死ってヤツ？」

水瀬のポツリとした言葉を、周囲は聞き逃さなかった。

「わーんっ！ルシフェの薄情者お！」

穴底へ、文字通り蹴り落とされた水瀬が、亡者のなれの果ての中から大声で文句を言った。

「ちよっとした冗談なのにい！」

返事のかわりにルシフェルが穴底に投げ込んだのは、先程の爆弾。

鼓膜がどうにかなったかと思うような爆発音と、地震と間違えるような振動が部屋を揺るがした。

「ル、ルシフェル！」

博雅が残った手榴弾の山を投げ込もうとするルシフェルを羽交い締めにして止める。

「落ち着いて！これだけやれば、いくらアイツだって懲りる！」

「……信じられない」

「わかった！事が終わったらどうとでもしていい！だけど、これ以上はダメだ！いいね！？」

「……わかった」

残念そうに箱を床に置いたルシフェルが博雅に言った。

「穴に降りるけど、博雅君。笛をお願い」

「あ？ああ」

「30分位は最低でも。村田警部補、あと、お願いします」

「わかったわ。一応、騎士警備部が外に控えてくれているから。

大丈夫よ」

そして、ルシフェルは穴の中へ向け、宙を舞った。

博雅が懷から笛を取り出すのを眺めながら、理沙は博雅に言った。

「君、浮気したら殺されるわよ？」

「わかってます。男として、悲しくなるくらい……」

穴の底に降り立ったルシフェルがまずしたこと。

それは、パートナーの搜索だ。

「水瀬君？」

「こ、ここだよお……」

足下から声がする。

「なんだ。まだ生きていたんだ」

「どいてえ……」

「ヒドイよお。防御シールドの展開、あと少し遅れたらBBQだったんだから」

「ハンバーガーとどっちがよかった？」

「……つみれの方。つくねでもいいよ？」

立ち上がる水瀬には、何の外傷もない。

「なんだか、最近、こういうのが多いなあ。……僕」

「自業自得。最近、やたらとセクハラ発言が目立つよ？」

「二課の人達と一緒にだと、こういうの当たり前だから」

「朱に交われれば赤くなるっていうけど、ダメ。立場考えなきゃ。

仮にも近衛の」

「はあい……」

「とにかく、綾乃ちゃんと桜井さんにはいいつけるからね」

「だからそれ止めてってば！」

穴の上から笛の音が聞こえてくる。

博雅の演奏、水瀬達にとって心強い支援が始まった。

「どっち？」

「こっちね」

ルシフェルが指さす方向には、ぽっかりと横穴が開いていた。

「じゃ、行こう。トラップ回避のため、飛行して」

「了解」

途端、二人の体は重力の束縛から解放されたかのように宙を舞い、そして横穴へ向けゆっくりと進んでいった。

穴の先にいるのは、あの時一緒に遊んだ智代であり、大切なクラスメートの美奈子。

どっちにしても後味が悪いことになるだろう。

「ねえ、水瀬君」

「何？」

「斬れる？」

「……斬りたくない」

「私、斬ろうか？」

「いい」

水瀬は言った。

「ルシフェルにそんなマネさせたくない。ルシフェルにとっても、大切な友達でしょう？」

「——うん」

「今は、桜井さんを元通りにする方法を考えよう」

「元通りに戻ったら、何て言う？」

水瀬は、少し迷った様子で、言った。

「はじめまして、
かな？」

第十話 「命の価値」

穴の中に響き渡るのは、笛の音。

現世への憎しみに凝り固まる死霊すら慰める、稀代の笛の音。

（すごい）

理沙はただ、じつと聞き入るだけ。

理沙の心を捉えるのは、旋律によって生み出される魂の感動。

それは子供の頃、宗教行事で感じたそれに近いもの。

子供の無垢な魂が、神に最も近い場所で、神を近くに感じた、あの感覚に近いものなんだと。

しかし、演奏者は納得していなかった。

放送局での一件では、死霊を一時的に止めただけだった。

源博雅なら、本物の博雅なら、死霊は成仏していたはず。

それが、わかだまりとなって博雅の心に引っかかっていた。

俺はやっぱり、本物にはほど遠いんだろうか。

俺はやっぱり、葉双が吹ける程度なんだろうか。

ふと。穴の底を見る。

穴の底は、亡者達であふれかえっていた。

——ほら。

博雅は自嘲気味に笑った。

どこに隠れていたかは知らないが、やっぱり奴らは健在。
俺の笛の音が珍しい程度か？

博雅は曲を変えた。

いいだろう。

下手な坊主だって、経文位、唱える事が出来る。

だったから、俺は俺で経文代わりにこれを吹いてやろう。

下手でも何でもいい。

俺は、俺のすることだけすればいい。

源博雅が稀代の大僧正なら、俺は一介の乞食坊主。

それでも、仕える道は同じ。

乞食坊主だって、死人に会えば経文くらい唱えるもんだ。

大僧正みたいな靈験なんてなくても、それでも唱えるしかないじゃないか。

それと同じだ。

なら、せめて、出来ることはしてやろうじゃないか。

博雅は、目を閉じて魂を解放した。

源博雅に固執する自分という殻を捨て、曲にすべてを委ねた。

それは、ある種の自暴自棄だったのかもしれない。

だが、それは吉と出た。

曲のキレが格段にあがったことが、音楽に鈍い理沙にさえ理解できた。

曲が螺旋を描き、DNAレベルで自分と絡み合うような、不思議なまでの感覚。

それは、間違いなく、浄化、そのもの。

その博雅が気づかなかったことがある。

穴の底に集まる亡者達が、自分を拝んでいること。

彼らが徐々に塵に戻りつつあること。

自分が、彼らの魂を浄化し、神仏の元へと送り届けたこと。

ただ、それら全てを超越したレベルで、博雅の演奏は続いたことだけが事実となった。

「博雅君、腕が上がったね」

「気づいたのよ」

「？」

「源博雅って人にとんでもないコンプレックスがあるのね？ どうしても、その人と自分を比較して、劣等感を感じてしまう。だけど、大切なのは、自分が自分だということなんだって」

「さすが」

縦穴から約10メートル。

突然、灯りが灯された。

「歓迎、されている？」

「イヤな歓迎のされかたね」

2つの古びた燭台に灯された灯りの下、着物姿で正座しているのは美奈子だった。

その手前には、幼稚園のスモック姿の智代がいた。

「移転に失敗したんでしょう？」

楽しそうにすら感じる声で智代に語りかけたのは水瀬だった。

智代の双眸が憎悪の光を放った。

「貴様、この娘に何をした？」

「ちよっとした細工。だめ。その子は催眠状態や憑依くらいは出来ても、魂を乗っ取るまでは出来ないよ？」

「何故だ？」

「僕が病院で細工しておいた。桜井さん、泣いて嫌がっていたけど」

「み、水瀬君？」

ルシフェルが水瀬の胸ぐらを掴んだ。

「な、なななにしたの!？」

「裸にひんむいて呪符を体に刻み込んだだけ」

「そ、それって——」

「大丈夫。痛くないし、魔法当てないと呪符は現れないし、何より背中だから」

「そ、そういう問題じゃない!!」
「？」

「女の子を裸にむくだなんて！」

「だって他に方法が——」

「——こら」

智代が苛立った声で言った。

「痴話ゲンカならよそでやれ」

「あ、ゴメンなさい」

「すみません」

素直に謝った後、水瀬は言った。

「あのね?取引しない？」

「取引？」

「うん。その子の体を諦めて、おとなしく鏡に戻ってくれたら、博物館でゆっくりとした余生をあげる」

「断ったら？」

「壊す」

「——これでもか？」

智代は無造作にスモックをはだけた。

「! !」
「! ?」

その光景に、二人は戦慄した。

智代の胸には、鈍く光る鏡が埋め込まれていたのだ。

しかも、その光は、まるで心臓の鼓動のように点滅する。

「鏡たる我は、この娘の心臓ぞ？この娘を殺せば、我はただの鏡に戻るかもしれんがな」

智代はそう言って、勝ち誇ったように笑った。

「殺せるか？この娘を」

「もう、死んでいるんでしょ？」

「死んではおらん」

「へ？」

「我らが、時が来た時に備え、眠らせておいただけじゃ。この娘は、死んではおらぬ。お前等やあの店の者達が見たのは、まちがいでなく、我じゃ。しかし、鏡としての我は、我が作り出したまがい物に過ぎん」

「人工心臓……」

水瀬は、ぽつりと言った。

「智代ちゃんを魔法で仮死状態のまま保存していたけど、何かあって、心臓が動かなくなった。だから、鏡の魔力を使って心臓の代わりを——」

「よくわかったな。つまり、我をこの娘から切り離すことは、すなわち、この娘が死ぬということじゃ」

「——で、それじゃ、不便だからって、新しい肉体を探した。どっちにしろ、その子は殺すつもりだったの？」

「違う」

「？」

「この娘を、新たな分魂として、我の仲間を作ろうとしたまでのこと」

「魂を、コピーしようとした？」

そんな、馬鹿な。ルシフェルが驚きを隠せない表情で、智代の言葉聞いていた。

「絶望し、心を閉ざしたこの娘は非常に都合のよい存在じゃ」

ぐいっ。

力まかせに美奈子のあごを掴む智代に対して、美奈子は虚ろな目で、ただ、なされるままだった。

「不要な心なら、我が新たな心を埋め込んでやるだけじゃ。感謝されこそすれ、恨まれる筋ではない」

「勝手を！」

激情のまま、斬りかかろうとして、ルシフェルは動きを止めた。

智代の勝ち誇った瞳に対し、ルシフェルの瞳は困惑していた。

どこを、どう斬ればよいというんだ？

相手は生身の人間だ。

鏡？

破壊すればこの子が死ぬ。

どうすればいいというんだ？

「バカめ。ここまで踏み込んできた努力に免じて、殺すことはせん。そのままにしておれ。我は新たな依代を求めて消える」

智代がそういつて、水瀬達に背を向けた途端――。

水瀬が、動いた。

死鏡には、何が起きたかわからなかった。

ただ、自分の身が割れていることには気づくことが出来た。

自分の体であるはずの智代の体は、宙に浮いている。

いや、浮かされている。

智代の目で、自らの身、本体を見つめる。

本体は、何かに貫かれていた。

光の刃――

「水瀬君っ!!」

遠くに女の悲鳴のような声を聞いた気がした。

そうか。

死鏡は思った。

死ぬのか――

また、死ねるのか――

今度こそ、

今度こそ、

……

安らかな眠りが来て欲しい……

不意に、光を感じた。

それは、安らぎの光。

光に包まれながら、死鏡は、消滅した。

●ルシフェルの日記より

何が起こったか、わからなかった。

水瀬君が、智代ちゃんを刺し殺したと理解できるまで、随分、長い時間がかかった気がする。

「水瀬君!」

智代ちゃんのスモックをはぎ取り、鏡の破片を払いのけた水瀬君を怒鳴った。

その時の私は、多分、水瀬君を殺そうとしたと思う。

「待って」

真剣な声でそういった水瀬君が、私に投げ渡したモノ――。

霊刃だった。

騎士が剣を渡すことには大変な意味がある。

それは、自らの命を委ねるということだから。

「どういう、こと?」

水瀬君は、すぐには答えず、懷から何枚かの符を取りだすと、智代ちゃんの体に貼り付けた。

「まだ死なさない」

「なにを!」?

「一週間、この子を預かる。1週間後の放課後、尚武で会おう」

水瀬君は、智代ちゃんを抱きかかえて立ち上がると、私に言った。

「その時、智代ちゃんが死んでいたら、その時は好きにしているよ?」

「……」

「じゃ、あと、お願い」

水瀬君は、そう言ってテレポートしていった。

第十一話 「終幕」

●ルシフェルの日記より

長い夜だった。

近衛から応援を呼び、洞穴を虱潰しにして、桜井さんを保護してもらい、

外に出たらお昼だった。

太陽が黄色く見えるって表現、こういう時に使っているのかなあ…。

病院に収容された桜井さんは2日後に意識を回復した。

ほとんどの記憶と共に――。

そう。例外は、病院で出会う前の水瀬君の記憶だけ。

よっぽどイヤな思いをしたんじゃないか、心配になる。

今度こそ、問題はなく、当日には退院できたけど……。

「あの強姦魔！色魔！変態！」

桜井さんは水瀬君のことを、こう呼ぶようになっていた。

そりゃ、裸にむかれたらそう思うよね？

それでも、何かにつけて水瀬君の話をしたがる傾向は、前より強くなっているような気がする。

瀬戸さんが知ったらどうするだろう。

知らないって。

あの夜のことは、警察内部でも極秘扱い。

鍾乳洞は近衛主導で封印されたという。

「白いご飯が食べられる！」

お礼にお米を持って行ったら、理沙さんは、米袋に涙ながらに頬ずりして

いたし、まあ、いいか……なあ。

で、私にとって、最後の難関が、智代ちゃんのことだ。

水瀬君との約束の日までの間、私は、智代ちゃんのことを尚武の人達に、どう説明するか、それを悩んでいた。

それは、お米のお礼にと理沙さんから聞いた話のせいもある。

「都筑はね」

理沙さんは言った。

「子供のために、鬼になったのよ」

「？」

「智代ちゃんは、重い心臓病でね。心臓の移植手術を受けるしかなかった。当時のことを知っている医者から聞いたけどね？ 都筑、ヤクザだからって、医者からまともに相手にされなかったんださうよ？」

「でも、患者は子供」

「ヤクザが金を払うモノか。下手に関わるとロクな目に会わないって」

「そんな……」

「だから、金のためにあいつは鬼になった。あいつが企業犯罪に手を染め始めたのと、智代ちゃんの心臓病の記録がほとんど一致しているのよ」

「……理沙さん」

私は聞いてみた。

「鬼って、人って、何ですか？」

「……」

「私、あの戦争で、魔族も見ました。人類のためって戦いました。でも、絶対的な悪と聞かされてきた魔族の方が人間らしくて、人間の方が悪魔みたいだって何度も感じました。理沙さんは――」

「そんなこと、神様だってわかんないわよ」

理沙さんは言った。

「世の中、善人ばかりでないのは、神様自身が人間を理解していないせいだって思うことがあるわ」

私だって、人間について語れるほど、年くっちゃいないわよ！とも言われた。

善であるはずの人が鬼になる。

それは恐く、また、悲しいことだ。

きつと、それは、あの死鏡もわかっていたんじゃないか。

ふと、そんな気がした。

死鏡が智代ちゃんの心臓になった理由。

それは、智代ちゃんを生かすため。

死鏡は、智代ちゃんに、生きて欲しいと思ったんじゃないだろうか？

だから、自らを心臓とまでした。

それは、単なる依代として必要だから。

ただ、それだけなんだろうか？

それだけで、10年も、智代ちゃんを眠らせておくだろうか？

何一つ、確かめる術はない。

だけど、私はそれが真実だろうと信じている。

死鏡には、智代ちゃんを殺す意志はなかった。と。

あいつ、意外とイイヤツだったのかなあ……。

そして、一週間後――。

最悪なことに、尚武の人達は、智代ちゃんのことを覚えていた。

記憶がどう操作されたのかはわからない。

ただ、智代ちゃんは、この家の養女として美桜さんと亡くなった旦那さんが引き取るようになっていた。と、少しでも記憶がズレていたのが気になった。

尚武の人達には、智代ちゃんは魔素による影響がひどく、近衛が一時的ではあるが面会謝絶で保護していると説明されている。

だが、それは水瀬君が智代ちゃんを生かしていたらの話だ。

あの時、水瀬君は間違いなく、智代ちゃんの命の灯を消した。

殺したんだ。

須藤邸の玄関で、私は手にした刀袋に力を込めた。

例え、友達でも、果たすべき責任は果たしてもらうために。

「あつれえ！？ルシフェルちゃん！？」

庭からひよっこり顔を出したのは、未亜ちゃんだった。

「あ、あの……」

「美奈子ちゃん！ルシフェルちゃんが来たよ！？」

庭が何だかにぎやかだ。

しばらくして、玄関が開いた。

美桜さんだった。

催眠魔法の後遺症はないらしい。

よかった。

「いらっしやい！悠理君から、後で来るって言われてたんです。
どうぞ？」

「は、はぁ……」

何と、庭ではバーベキューが始まっていた。

何でも、ちょっと前に試し斬りが行われた関係で、お客も多いという。

主宰はなんと水瀬君。

羽山君や秋篠君はともかく、岩田警部までが牛を真っ二つにしたという。

牛も気の毒に。

美奈子ちゃんに未亜ちゃん、羽山君に博雅君のいつもの面々がいた。

さらに、南雲大尉に桜井先生どころか、理沙さんや岩田警部までいたのには驚いた。

大人はみんな、尚武の人達に混じってビール片手にお肉を食べまくっている。

本当に宴会だ。

そして

「お姉ちゃん！そっちのお肉がいい！」

「だから僕はお兄ちゃんだって」

元気な声で水瀬君にお肉を焼いてもらっているのは、智代ちゃんだった。

「智代ったら、ずっと悠理君の側から離れないんですよ？」

生きていた。

元気だ。

ため息が出た。

よかった。

本当によかった。

「はい。ルシフェ」

水瀬君が私にお肉が山盛りのお皿を渡してくれた。

「牛一頭分あるからね？ たっぷり食べて」

「やっぱり、人が悪いよ。水瀬君って」

「上には上がいるもん。僕くらいなら、可愛いものでしょ？」

「あーっ！お姉ちゃんズルい！」

文句の一つも言おうとしたら、智代ちゃんに遮られた。

「え？ な、何が？」

私、何かしたかな？

「それ、私が食べたかったお肉なのにい！」

「だあめ。お野菜も食べましょう」

水瀬君は、そういつてサンチュに巻いたお肉を智代ちゃんに手渡す。

「うー」

「おいしいよ？」

黙ってぱくつく智代ちゃん。

おいしいって顔してくれている。

その無心の姿に、私は心の底から安堵した。

あの亡者の中から、この世に戻った智代ちゃん的笑顔が、私にとって何よりの報酬だ。

「お肉！牛肉！1年ぶりのステーキいいいっ！しかも北海道和牛！！」

「村田、食い過ぎだ。というか、泣くか食べるかどっちかにしろ」

「あーっ！あの刀欲しい！」

「試して牛1頭真っ二つとはな。羽山、腕を上げたなあ」

「記念に飲むぞ！」

みんなは相変わらずのどんちゃん騒ぎ。

ああ。やっと日常に戻った。

くだらないどんちゃん騒ぎがとても楽しい。

私もお腹空いたな。

ダイエットという言葉が重くのしかかるまで食べたこの夜、私達はそもそもの原因と対面することになった。

スイカを食べていた時だ。

「あら？」

桜井さんがポケットから携帯を取り出した。

「メール？——綾乃ちゃんから？」

「綾乃ちゃん、今、どこに？」

「北海道でロケだって——えっと、何々？……」

目が点になるほど呆れた。桜井さんはそう言って、私にメールを見せてくれた。

「桜井さん

その後の経過はいかがですか？入院当時のことについて詳しく聞きたいので、近々、時間をとっていただけませんか？人気のない所で、じっくりと聞きたいことがあります。二人っきりで。

追伸

護衛に来ていた水瀬君が逃亡しました。

そちらにいるようでしたら、捕まえておいて下さい。

綾乃」

「なんだか、綾乃ちゃん、私に誤解があるみたい……」
「身に覚えは？」

「水瀬君に身ぐるみはがされたことなんて、恐くて言えないわ。それに、あれのおかげで、私、助かったんでしょ？」

「まあ、それはそうだけど……」
情報源は多分、この子だろう。と、未亜ちゃんをちらりと見る。
未亜ちゃんもメール中みたい。

私が、未亜ちゃんに声をかけようとしたら、奥から主が出てきた。
「坊ちゃん。完成しましたよ？」

主がそう言って桐の箱を、水瀬君の前に差し出した。

「え、っ!？」

真っ青になる水瀬君。

「あ、ああ、どっ、どうもありがとうございます!か、帰ってからじっくりと」

「それは困ります。この場で直に検分して頂かないと」
主はあくまで仕事の顔だ。

「ん? 刀か?」羽山君が気づいたらしい。

「え? あははははっ! ぼ、僕のじゃなくて!」

「坊ちゃんの御愛刀でしょうが」

主は無然として言った。

「ウソはいけませんな」

「はううう……」

「おい水瀬、開けろよ」

「あら？悠理君だって褒めてくれたじゃない」

美桜さんが不思議そうに言った。

「あの時、私が転んで、襟に口紅つけちゃったの、そんなに怒ってるの？」

「そうじゃなくて……」

「みんなに知られたくなかったのか？」と博雅君。

「う、うん……だって、みんなスタンブレードとか、お金の面で苦労してるのに……」

「アホかお前」

そういつて水瀬君の後頭部を突いたのは羽山君だった。

「俺達だって好きでやってるんだ。お前だってちっとくらい金かけたっていいんじゃないか？」

「う、うん……」

じゃ、開けるね？

そういつて水瀬君は箱の蓋を開けた。

息をのんだ。

黒漆地に純金の覆輪や貴金が光っている。

何より、鳥をイメージしたらしい鰐はまさに芸術品だ。

私も見とれていた。

「イメージは、坊ちゃんの凶面通りです。いや。さすがにお目が高いというべきか」

「これ、真剣か？」

「うん……初音」

「水瀬君にとって一年戦争の時の相棒だよ」

私がフォローするように言った。

「石突のこれ、アクアマリン……ちがう。魔晶石ね？……これ、普段用の刀飾？」

「う、うん……」

「こんな派手なの、許可降りるの？」

私は水瀬君の耳元でささやくように訊ねた。

近衛は自由奔放に見えて、伝統的な、意味での規律、不文律の規則には結構厳しい。

「問題ないよ。一応、司令部の許可も、この程度なら不要だよ？
で、この後、防御魔法かけて痛まないようにするんだ。それで仕上がり」

「私もやっていいの？」

「黒漆だったら、何とかなるよ？」

「じゃ、早速、この後」

「お揃いにしてくれる？」

「い・や」

「で？いくら突っ込んだんだ？」

羽山君が水瀬君に聞いてきた。

「え、っ！？」

「全部で八——」

主がおぼつかないように言うのを、

「わーっ！わーっ！」

水瀬君が大あわてで遮る。

「成る程」

羽山君が納得したという顔で言った。

「あんまりに突っ込んだから、いづらかったというわけか」

「う、うん……ゴメンね？」

「まあ、いい。ただ」

「？」

「ちっと、振らせてくれ」

「ところで」

初音を囲んで、羽山君と博雅君が主相手に刀談義に入るのを尻目に、私は水瀬君に訊ねた。

「智代ちゃん、どうやって助けたの？」

「心臓を作り直した」

「へ？」

「作れる呪符、試作していたんだ。まさか使うなんておもわなかったけど」

「ふうん……でもね？」

私は、一番言いたいことを言った。

「そういうことは、ちゃんと説明して。ちゃんと説明してくれれば、大丈夫だから」

「ルシフェ……」

「友達でしょ？」

「うん」

水瀬君が何か言おうとした時、

「お姉ちゃん達お休みなさい！」

元気にそう言ってきたのは、智代ちゃんだった。

「はい。お休みなさい」

「お休み」

「さ、智代？ パパにもご挨拶しないとね？」

「うん！ 智代、今日もいい子だったから、きつと褒めてくれるよね？」

そんな会話を聞きながら、私は心の中で二人の男の冥福を祈った。この子の実の父と、義理の父に……。

大丈夫。

あなた達が護ってくれるなら、護ってくれているから、智代ちゃんは幸せなんですよ。

「あっ？水瀬くん？」

未亜ちゃんが玄関から声をかけてきた。

「あ、そろそろおいとましないと」

「そうね」

みんなが腰をあげた。

「綾乃ちゃんが待ちかまえてるよ？美奈子ちゃんに病院でナニしたのか説明して欲しいみたい」

「え、っ！？」

「だっ、だって綾乃ちゃんは北海道にロケで」

「チャーター便でも飛ばしてきたんじゃない？」

「なんて非常識な……」

「ああなると、綾乃ちゃんに一切の常識は通じないと思う」

「気楽に言うな！」

美奈子ちゃんが未亜ちゃんに突っ込む。

「あ、あんた、綾乃ちゃんにナニ言ったの！？」

美奈子ちゃんも慌てているらしい。

そりゃそうだろう。

「えっとお、入院中、水瀬君が何度かお見舞いに行っていたとか、記憶のないはずの美奈子ちゃんが、いつも水瀬君を待っていた。とか教えてあげたら、詳しく説明してくれていうからね？水瀬君が美奈子ちゃんを手込めにしたとか、美奈子ちゃんの病院での診察先は、内科じゃなくて産婦人科だとか、病院のベットが二人の愛の巣になってたとか。……あっ。冗談だってメールにつけるの忘れてたあ」と笑う未亜ちゃん。

「なっとななななっ！」

真っ青になるのは水瀬君。

真っ赤になるのは桜井さん。

いっそのこと、「赤鬼と青鬼のタンゴ」を踊って欲しいな。

きつと、智代ちゃんも喜ぶよ。

「だってえ！診察受けていたのは確かでしょお？美奈子ちゃん、

あの日が来ないからってえ」

「待ちなさい未亜！今度こそ息の根止めてやる！」

「ルシフェ！僕、逃げる！」

こうして、この騒ぎも一段落し、次の騒ぎへと続いていくわけだ。
私は、自分でも妙な納得をしてしまったものだと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2759b/>

刀と嫉妬と看板娘

2010年10月14日23時18分発行